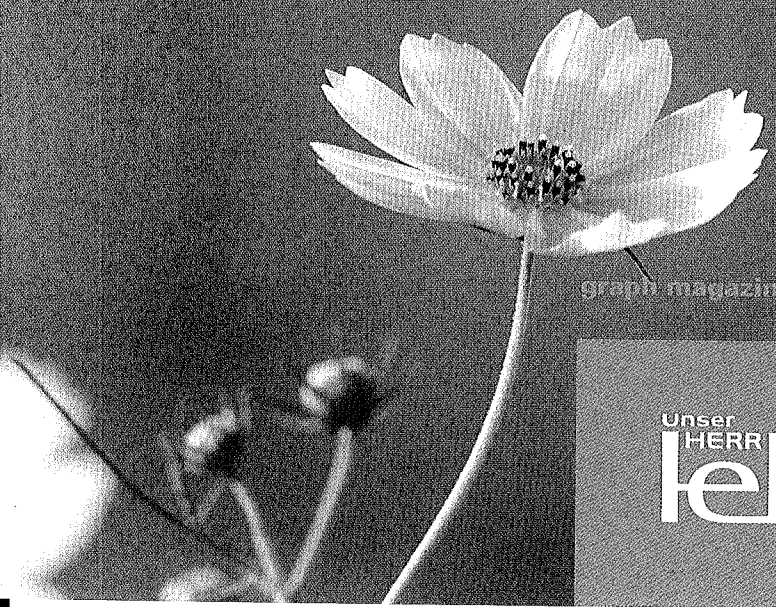
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2014 graph magazine vol. 34

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 34 定価100円（税込み）

Unser HERR lebt

主は生きておられる

メッセージ

4 死は終わりではない　ゴットホルド・ベック

10人の証し

18 御旨にかなう道を備えてくださる主　古屋幸助

24 試練の中でいただいた主の恵み　酒井正人

31 いのちの光であるイエス様　酒井美恵

38 イエスさまを知ることは知識としてのキリスト教とは
まったく違いました　望月真澄

44 苦しみは恵みのためでした　橋本至芳

51 主の憐れみによって生かされる　森島左武郎・久仁子

60 求めなさい。そうすれば与えられます　伊藤さをり

68 イエス様からの一方的な恵みの歩み　伊藤栄子

77 神の恵みによって、私は今の私になりました　柏谷真美

86 御手のわざは確かです　名須川知子

死は終わりではない

ゴットホルド・ベック

今から十三年前の二〇〇一年九月十一日に、アメリカで想像を絶することが起こりました。テロによって数えきれないほど多くの犠牲者が出たのです。このとき救助にあたったニューヨーク消防署には、こう書かれた石のプレートが置かれました。

誰も別れのことばを語れなかった。
さようならを言う暇もなかった。
私たちの知らぬ間に、あなたは召された。
どうしてかということは
主なる神にしかわからない。

書かれているように、なぜ多くの人々がこのようにして死ななければならなかったのかは、人間には答えられない問題です。宗教的な見方から「天罰だ」と言う人がいるかもしれませんが、それこそ真実から最も遠い考え方です。なぜなら、まことの神様は人間を罰することはなさらない、というよりも、罰する必要がないのです。イエス・キリストが人間のわがまま、罪のために身代わりとして罰を受けてくださった。これが聖書の言わんとすることです。すばらしい福音です。預言者イザヤは、次のように神様をほめたたえています。

見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。（イザヤ　12・2）

こういう確信をもって生きていけるなら、それこそ最高の幸せというべきでしょう。

では、救いとは何でしょうか。

1　聖書の「救い」

聖書でいう「救い」とは、第一に「罪の問題の解決」です。人間はみなわがままで、過ちを犯す者ですから、良心の呵責に苦しんでいます、罪を贖うためには、人間は何もできないのですが、イエス様の救いの結果として私たちは罪が赦された、忘れられた、と確信できるようになります。

また、まことの救いは「孤独からの解放」です。人間はみな心の中に寂しさをもっています。もっと大切にされたい、もっと愛されたいと思っています。しかし、イエス様の救いを受ければ、もうひとりぼっちではない、イエス様は私を愛してくださっており、決して見捨てたり手放したりはなさらない、という確信が与えられ、孤独から解放されます。

そして、まことの救いは「死の恐怖からの解放」でもあります。死については考えたくない、というのが多くの人の気持ちですが、人はいつか必ず死ぬものです。安心して希望をもって人生の終末に向かうことができなければ、「死」は恐怖でしかありません。「死」を恐れることからの解放こそイエス様を通して提供されている救いです。聖書の中には次のようなことばがあります。

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」

しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。（1コリント　15・55〜57）

「死」の恐れから解放され、「死」に勝利したと心から言うことができれば、本当に幸せではないでしょうか。

私は、ドイツの出版社の社長の息子がテレビ番組で言っていたことを忘れることができません。彼は、「あなたにとって人生で最大のショックと言えることは何ですか」と尋ねられて、「もし神が存在したら、それこそ考えられないほど恐ろしいことだ」と答えたのです。その意味は、もし神が存在するなら、「死」はすべての終わりではなく、死後に必ず裁きを受けることになる、ということです。裁きを受けて、永久に光が見えず、平安も喜びも希望もないまま永遠に「地獄」に居続けることとは考えられないほど恐ろしいことではないでしょうか。

天国について、聖書は「もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。」（黙示録　21・4）と記しています。「救い」を得た人々に約束されている栄光は、すばらしいものです。「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」（ローマ　8・18）と使徒パウロも言っています。

2　死を直視する

私の末娘であったリンデは、看護学生のときに癌になり、二十歳で天に召されました。リンデはイエス様のために実を結びたいと切に願っていました。彼女にとって自分の健康や自分の幸せは枝葉（えだは）のことでした。「ただイエス様だけが栄光をお受けになるとき、私は嬉しい」というのが、彼女の態度でした。そして、この証しは実を結ぶようになりました。リンでの周りにいた多くの人々がイエス様を求めるようになり、イエス様を個人的に知るようになったのです。リンデは自分の聖書に、「人格者とは死を直視することができる人です」と書きこんでいました。

死後のことは死んで初めてわかることであり、この世で生きている間はそんな問題に煩（わずら）わされたくない、と考える人は少なくありません。「死」について何かを話そうとすると、嫌な顔をしてそれを拒む人は少なくありません。太陽王と呼ばれたフランスのルイ十四世もそうでした。葬式の列が通るのを見ると、すぐに「カーテンを閉めろ」と命令したそうです。彼は自分が望むものは何でも、名誉、地位、財産、その他あらゆるものを手に入れた絶対君主でした。その彼が一番嫌ったものが「死」だったのです。またドイツの偉大な詩人であり政治家でもあったゲーテも「死」を忌み嫌い、非常に親しい人の葬式にさえも出席しなかったそうです。

多くの人々は、いろいろなことについて計画を立て、その計画にしたがって行動しようとします。ところが「死」がやって来るとすべてが台無しになってしまうので、「死」については考えないようにしています。そして、生きている限りできるだけ楽しみたいと強く願っています。

これこそ悪魔の仕業です。悪魔は、「死」について真剣に考えることをやめさせ、目を眩（くら）ませて享楽的な生活へと誘いこみ、絶えず悪の罠に引き込もうとするのです。けれども「死」は逃れられない現実

です。毎日、無数の人が病気や事故で死んでいます。過去二度にわたる世界大戦では約八千万人の人々が殺されました。日本では毎年三万人もの人が自ら命を捨てています。「死」は否定することのできない現実です。「死」について真剣に考えようとしないのは、愚かなことではないでしょうか。

3　死後の世界

聖書は、この世とは別に死後の世界があると言っています。

「死」について冷静に考えれば、「死」がすべての終わりを意味するのではない、ということを認めるようになるはずです。永遠に生きておられるまことの神によって造られた人間の人生が、「死」で終わるとは考えられません。働く人は必ず何らかの目的をもって働きます。大工が家を建てるのも、また工場で機械を作るのも、はっきりとした目的をもってしています。意味も目的もなしに働くことなどありえないのです。そうであるなら、全能の主なる神様が人間を創造されたのも、はっきりとした一つの目的をもってなされたことは明らかです。ですから「死」について考えるなら、「死」そのものだけではなく、死後に来るものに注意を向けなければなりません。「死後の世界」について、六つの点からご一緒に考えてみたいと思います。

(1)短すぎる人生

私たちのこの世の人生はあまりにも短すぎます。長生きしてもせいぜい百二十歳ほどの「寿命」を考えれば、聖書の言っていることの正しさを認めないわけにはいきません。聖書は、「あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。」(ヤコブ 4・14)と言っています。私たちは「ちっぽけなもの」であり、聖書に記された六千年を越える人類の歴史さえも、主なる神の目から見れば「霧」に等しいものです。私たちは、百年前についても百年後についても何一つ体験できないのです。

私たちの人生があまりにも短いという事実に目を留めるなら、死後の世界があると考えることは当然ではないでしょうか。聖書は「死後の世界」があることをはっきりと教えています。死んでから初めて本当の世界に生きるのです。

(2)「永遠」、「完全」への思い

主なる神ご自身が人間の心に「永遠」を思う思いを授けられた、と聖書は言っています。人間は、主なる神のかたちに似せて造られました。その神様が人間に「永遠とは何か」、「完全とは何か」を理解する力をお与えになったのです。ですから人間は、過ぎゆく儚(はかな)いものや不完全なもので心が満たされることはありません。たとえば、人間は心から愛し、愛されることを望んでいます。しかし、それはこの世には見いだされません。だから人間は、この世の人間的な愛に幾度も失望させられるのではないでしょうか。また、芸術家は情熱をもって完全なものを作ろうとしますが、しばしば自分の作品を自らの手で破壊してしまいます。出来上がった作品が完全なものではないと認めるからです。

また、青年は将来に対して無限の希望をもち、それが永遠に続くように思っているでしょうが、年寄りは過ぎ行く一年が非常に短く、儚いものであるという

死は終わりではない

ことを体験的に知っています。また、多くの婦人たちはいつまでも若く、美しくありたいと願い、努力しますが、結局はどうにもできないことを知って失望します。

新しいものが次から次へと与えられても人間の欲望は決して満足させられることはありません。次から次へと目まぐるしく移り変わる流行を必死に追い求めても、それが幸せをもたらすとは言えません。実業家は金儲けのために頭を働かせ、独裁者は自分の国を支配するにとどまらず、世界までも支配しようと無限に欲望を高めていきます。いわゆる仕事の鬼は仕事だけを大切にして奮闘しますが、結局は何のために生きているのかわからなくなり、行き詰まってしまいます。人間的に見ると仕事が成功し裕福で病気もせず問題がなさそうな人でも、心の中にはいつも満たされない思いがあります。主なる神様なしに、私たちの心を満たしてくれるものはないからです。私たち人間がイエス様にあって「永遠のいのち」をもつことこそ、主なる神様のみこころなのです。

「ヨハネによる福音書」4章には、五人もの夫をもっていた姦淫の女のことが描かれています。もちろん、彼女も幸福になりたいという願いをもっていたはずですが、その切なる思いが満たされることはありませんでした。主イエス様は、その女に次のように言われたのです。「わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」（ヨハネ 4・14）。すると、女はイエス様に願いました。「先生。私が渇くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」（ヨハネ 4・15）と。

中世の偉大な思想家でキリスト者でもあったアウグスティヌスも「私が主なる神のもとで憩うまで、まことの平安はない」と告白しています。

（3）死後の世界は存在しない？

もし死後の世界がないなら、死で終わるこの世の人生はまったく意味のないものになるでしょう。「永遠」があってはじめて「今」の人生が意味あるものとなるのです。もしすべてが「死」で終わるとすれば、生きているときのあらゆる努力は、どんな価値をもつと言えるのでしょうか。知者で知られたソロモン王はこの世のものはすべて虚しい、「空の空。すべては空。」（伝道者 1・2）と言いました。彼は王の地位にありましたが、「すべてはむなしい」と告白しなければならなかったのです。この世で永遠に価値が持続するものは何一つありません。私たちがこの世でもっているものはすべて、「死」と同時に取り去られてしまうのです。

唯物主義者は、「私たちは飲み食いしようではないか、明日もわからない命なのだから」と言うでしょう。しかし、歳をとり時間も金もなくなったときにはそれさえもできず、ただ病と死だけが待っていることになるからです。死後の問題を解決することができなければ、自殺をするか、狂気に至るか、いずれにしても悲惨な道しか残されていません。

（4）この世は「正義」？

この世の「正義」も、私たちを心の底から満たしてはくれません。なぜなら、私たちの完全な正義に対する熱望は、この世の「正義」によっては満たされないからです。社会にある多くの不義は、必ずしも正

死は終わりではない

しくさばかれているとは限りません。また反対に、この世で正しく生きている人々が、必ずしもそれに見合った名誉と報酬を受けているわけでもありません。むしろ真理に生きたために迫害されたり殺されたりする人々がいます。死によってすべてのことに終止符が打たれるのならば、今の人生はまったく意味のないことです。けれども、事実は決してそうではありません。

(5)再会

死んでから愛する人と再会できる、という確信をもてることは幸いです。確かに愛する人の死は、キリスト者にとっても悲しく寂しいものです。それにもかかわらず、愛する人との別れは一時的なものに過ぎない、必ず天国で再会できるという確信を持つことはという約束を与えられていることは、考えられないほどすばらしいことです。

あらゆる宗教は死後の世界について語ってはいますが、単なる想像に基づいて、抽象的なことを言っているにすぎません。しかし神のみことばである聖書は、信仰者にも、未信者にも、死後の世界があることを明らかに記しています。

聖書によれば、アブラハム、イサク、ヤコブのような四千年前に生きていた人々が、今もなお天に生き続けていることがわかります。一方で、悔い改めようとしなかった人々は陰府(よみ)の国に落ちて行き、そこで苦しまなければなりません。イエス様は、主に対して頭を下げたくなかった人々が死後、陰府の国で苦しむとき、彼らは無意識な状態にあるのではなく、はっきりとした意識をもって苦しむことになる、と言われました。信じようとしなかった人々はすべて、陰府の国で主なる神の前に引き出され、最後の審判を受けなければなりません。

結局、死は終わりではないのです。救われている人も救われていない人も死後に生き続けます。そこでは、救われた人々は永遠のいのちをもって主なる神とともにおり、悔い改めたくない人々は苦しみと苦悩の中に滅びなければならないと聖書は言っています。

4 永遠のいのち

これまでの内容をわかりやすく要約すると、まず第一に、人間は生まれたときに「たましい」を与えられ、永遠に存在する権利が与えられます。第二に、そのような人間が罪を悔い改めて、イエス様を信じる信仰によって新しく生まれ変わったときに「永遠のいのち」が与えられます。第三に、そのような人は復活

最高の慰めであり、また喜びでもあります。

(6)死後の二つの世界

イエス様は、もう一度来る、と約束しておられます。「そのとき」に信じる人々が顔と顔を合わせて主を見て、イエス様に似た者とされることは、創造主である神のご計画です。

人間は主ご自身のために造られたのだ、ということを忘れてはいけません。初めの人間であるアダムが罪によって主なる神様から離れてしまったため、人間は主なる神との生き生きとした交わりを失っています。しかし、主なる神との生き生きとした交わりを「回復」しなければ本当の意味で生きているということはできません。罪を赦され、救われて、永遠にイエス様との交わりの中にときを過ごすことができる、

死は終わりではない

のとき、「不滅のからだ」を与えられます。確かに未信者であっても永遠に「存在する」わけですが、新しく生まれ変わらない限り、「永遠のいのち」をもつことはできません。

「永遠のいのち」は、イエス様との交わりの中にあってはじめて存在するものです。ヨハネは次のように書いています。

永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。（ヨハネ　17・3）

この方（イエス・キリスト）こそ、まことの神、永遠のいのちです。（1ヨハネ　5・20）

主なるまことの神様を信じない人々は、この世で真のいのちをもっていません。彼らは主なる神様との平和を知らないために、満たされていません。

二十歳で天に召されたリンデは「人格者とは死を直視することのできる人」と書きました。「死」を直視することのできる人とは、イエス様によって救われた人です。パウロは「キリストこそ私たちの平和」（エペソ　2・14）と証ししました。イエス様が、主なる神と私たちとの和解をなしとげてくださったからです。主イエス様は、私たち人間が主なる神様から離れ、主なる神に敵対している罪と債務を、ご自身の尊い犠牲によって完全に取り去ってくださったのです。

まことの平和はイエス様を信ずることによってのみ与えられます。イエス様を信じる人はみな、主なる神との平和、また罪の贖いを確信することができます。イエス様の犠牲が完全な贖い、神様との和解を成就したから、主なる神様はもはや怒ってはおられません。もはや何ものも神様との結びつきを切り離すことはできません。主なる神との平和をもっている人は、完全な平安のうちに休むことができるのです。死を恐れる必要はありません。

音楽家、ヨハン・セバスチャン・バッハは数々の名曲を残しましたが、心から「死」を待ち望んでいることを歌の中にはっきりと書き表しました。生きているこの世よりも、死んだ後に来る世界のすばらしさを信仰の目で見ることのできたバッハは、主を賛美しないではいられなかったのです。本来は罪人である以上、信仰者も未信者と同じように陰府（よみ）の国へ行かなければならない運命に定められていました。そうであるにもかかわらず、神のひとり子なるイエス様の十字架の死によって罪が贖われ、罪から解放されて、「永遠のいのち」をもつことができたのです。「ローマ人への手紙」には次のように書かれています。

キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。（ローマ　8・1）

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ　8・38〜39）

「死」は、信じる人にとってはイエス様に近づくための橋渡しの役割を果たすと言えましょう。

生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。私に

死は終わりではない

とっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。（ピリピ　1・20〜21）

私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です。（ピリピ　1・23〜24）

主の恵みによって救われた人々にとって、死ぬことはイエス様とともになることを意味していますから、益なのです。パウロは死ぬことと生きることとどちらが良いか考えたとき、死を望みました。救われた人々には、未信者がいだくような「死」への恐怖がまったくないのです。

第二次大戦中、六百万人にのぼるユダヤ人がヒットラーによって殺害されました。その当時オランダにテン・ブームという家族がいて、多くのユダヤ人をかくまっていました。ところがある日、ナチスの秘密警察がそれを見つけ出し、全員強制収容所に送ってしまいました。コーリンという名の娘一人を除いて家族はみな殺されてしまいました。しかし、コーリンの父親は家を去るにあたって、「一番すばらしいことがこれから始まる」と大喜びで言ったのです。このことばは、彼らの出発が恐ろしい死への旅立ちではなく、イエス様とともになるための最高の喜びと感謝の旅の始まりだということを表現しています。

主イエス様のものとなった人々は、将来与えられる栄光を見て、生き生きとした希望をもちます。どんな患難のときにも主を喜ぶことができます。将来に対する何の不安ももたないからです。私たちは、将来のことを知ることはできませんが、イエス様を知っています。ですから、イエス様にあって将来のすべてを知っていることになるわけです。イエス様ご自身が私たちの将来です。あらゆる不安と心配は、イエス様によって慰められるのです。イエス様は、ご自身を信頼する人を必ず目的地まで導かれます。主イエス様を信じる私たちは、今、喜ぶことができ、誇ることができ、感謝することができるのです。

三千年前、イスラエルの王であったダビデは言いました。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。（詩篇　23・1、4）

このような確信をもつことこそが最高の幸せなのではないでしょうか。

死は終わりではない

御旨にかなう道を備えてくださる主

古屋　幸助



妻の純子さんと

私は一九五三年一月に、東京都で生まれました。十歳のとき主に出会い、救われ、満六十一歳の今までずっと守られ支えられてきました。主が私に何をしてくださったのか、その恵みの一部分をお証しさせて頂きます。

小学五年生の秋、ホーリネス教団の本部が近所に引っ越してきました。私は、この教会の日曜学校に通うようになり、楽しく歌う子供讃美歌に心ひかれ、毎週楽しみに集っていました。

当時は教会に二百名を超える子供たちが集っていました。ある礼拝のとき、悪い友だちとお店のガムや他人の家の柿を盗ったことなどの醜（みにく）い罪が示され、「このままでは天国に行けない。こんなことをしていてはだめだ」と子供心に改めたいと思うようになりました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

イエス様が十字架にかかってくださったのは私の罪のためであったこと、信じる者は誰でも永遠の命が与えられることを知りました。日曜学校の先生と共に祈り、このみことばをはっきりと受け入れ救われました。しかし、家族からは理解されず、信仰を守るのも必死で、悲しい思いもしました。礼拝に出席し、主を賛美しているときが本当に嬉しいときでした。

中学生の頃は、家の手伝いや勉強もして教会に行くことを、家族に認めてもらえるようになりました。中学三年生になった頃から急激な体の成長に内臓がついていけず、体調をこわしてしまいました。それ以前、校内マラソンをいつもベストテンで走っていましたのに、百メートル走るのが精いっぱいの状態になりました。自分が情けなくみじめで、「イエス様を信じているのにどうしてこうなってしまうのだろうか。『苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。』（詩篇　119・71）、というみことばの意味を教えてください」と祈りながら、ときが過ぎるのを待ちました。早く大人になりたいと思った試練のときでもありました。

高校生になり、体調が安定した中で、また新たな試みに会いました。信仰は孤独な自己との戦い、罪との戦いでもあり、自分自身を制することはなかなかできません。

高校二年生の頃、様々な思想や哲学にはまってしまいました。学園紛争の時代、三島由紀夫が自決した頃です。私は聖書を読みつつ、厭世観や虚無主義、実存主義の思想に入り込み、自分がいったいどういう者かについて考え悩みました。主によって救われた自分であることを自覚しつつ、周囲の人たちに主を伝道してもわかってもらえない日々が続きました。親からは、「いい加減に教会に行くのはやめなさい」と言われ、高

校の友だちからは、「おまえは日和見だ。信仰は弱いものの妥協の産物だ」とも言われ、言い争いになってしまうこともありました。

本当にどうしたらよいのか、頭の中で信仰と哲学、思想が廻りめぐり、今で言えばノイローゼか鬱（うつ）状態であったと思います。ブーバー、ニーチェ、キルケゴールその他の哲学書に関心をもっていました。哲学者は、神とはどういう方か、人間とはどういうものか、について論じています。神は死んだ。超人とは何か、絶望とは何か、真の幸福とは何かとか、いろいろな思想が心の中でぶつかり合い悩みました。しかしそうではあっても、毎週礼拝に集い、主を見つめていました。

立直るきっかけとなったのは、体育の授業で剣道をしているときでした。相手の竹刀が右耳に当たり出血し鼓膜を失ってしまったことで、主からの示唆が与えられました。音楽が人一倍好きで、些細な音を聞き分けるほどの良い耳を持っていると自負する者でしたが、片耳ではあっても鼓膜を失ったことは自分としては大きな痛みでした。実に、痛い目に会って主のご愛がわかりました。

鼓膜が破れ、痛く、耳鳴りがずっとする中で、第一列王記19章12節にあるように、「細い声」として主の声が聞こえました。色々な書物や表面上の人間の声ではなく、心に語られる主の真実の声を聞くことが大切だ、ということにたどり着くことができました。私は真実でなくても、主は真実なお方、そして愛のお方だ、ということが次のみことばによってわかりました。

いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。（詩篇　36・9）

これは、いのちの源は主イエス様であり、主ご自身の光の内に真の光を、また希望を見出すことができるという約束です。後で知ったことですが、奇（く）しくも聖オーガスチンが主を再認識したみことばだそうです。「コンプレックスよりシンプルに」、いつもここに立ち返りたいと現在も思っています。

教会から集会へ

一九八〇年五月、牧師の紹介で純子姉妹と出会い、「三つ撚りの糸は簡単には切れない」（伝道者　4・12）という聖書のみことばで主の導きを確信し結婚しました。二人の息子、長男和宣、次男知紀が与えられ、毎週家族で教会に喜んで集っていました。

結婚して十年がたった頃、純子姉妹は集会の火曜の学び会に通うようになり、兄弟姉妹方との交わりを頂きました。姉妹は「舟の右側に網をおろしなさい」（ヨハネ　21・6）のみことばで教会を離れることを決意し、当時四歳の次男を連れて集会に移りました。私は長男と教会にそのまま残り、家族は別々の礼拝に出席するようになりました。

私は「どんなことがあっても純子とずっと一緒にいたい」と思っていましたので、最愛の妻が教会から離れるという、あり得ないはずの現実に苦しみました。

姉妹の言うこともわかりますし、ベックさんのテープや本もその通りだと思いつつ、子供の頃から通っている教会は私にとってとても大切な所でしたので、なかなか教会を離れる決断ができないでいました。御代田では、ベックさんにお会いする機会が与えられ、「家族は一つがいいね」とお言葉を頂きましたが、わかっていても踏み出せない自分でした。

一方、私の母千恵が純子に連れられ、ときどき家庭集会に集うようになり、姉妹方との交わりや、ベックさんにもお会いする機会が与えられました。一九九六年、母は末期の肝臓癌で昭和病院に入院し、亡くなる前にベックさんにお見舞いを頂きました。私も同席しましたが、母が本当に喜んで笑顔でベックさんとお交

わりし、嬉しい顔をしていることを目の当たりに見せていただきとても感謝でした。本当に主の導きに感謝した次第です。

一九九八年四月、長男は高校二年生、次男は中学一年生を迎え、私も限界を感じていました。家族は一つが良いこと、また「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい」（創世記　12・1）というみことばが与えられ、三十五年間通い慣れた教会に別れをつげ、吉祥寺キリスト集会へ導かれました。教会でイースター礼拝の司会の奉仕を終え、礼拝後牧師に今までのことを感謝し、祈って頂き、お別れしました。実に父の家を出て、新しい地への一歩でした。

この間のことについて姉妹は、「今振り返ると、あの頃は一生分の喧嘩をしたね」と言っています。集会に集うようになったあるとき、息子たちにこう言ったことがあります。「親が喧嘩をしていたのに良くここまで育ってくれたね」と。すると、息子たちは声をそろえて言いました。「何を言っているんだ。俺らがどんなに我慢してきたと思っているんだ」と怒りました。弁解の余地もありませんでした。子供たちの成長の大切なときに、夫婦が一つになれないことで、子供たちにどれほど辛い思いをさせたか、本当にすまなかったと思います。

二人の子供たちはその後、そろってカナダのキャンプで洗礼の恵みに与かりました。こうして、主は、私ども家族を憐れんでくださり、祝福をもって導いてくださいました。

職場での主の守り

私は銀座にある聖書館ビルにある一般財団法人日本聖書協会に勤めております。この法人は明治の時代から聖書の翻訳・出版・頒布・普及を行ってきています。仕事の関係上、職員はじめ、多くの牧師さんや、信徒の方々、理事の方々と会う機会があります。

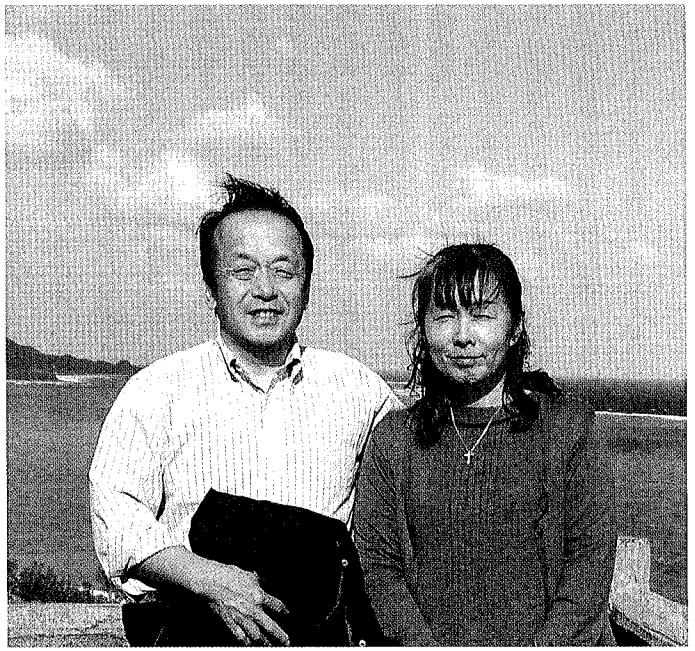
ときどき、キリスト集会のことを聞かれることがあり、その何人かに集会のCDや本などを手渡すこともあります。集会は人や組織ではなく主イエス様だけが褒め讃えられるところだと証しています。「責任者のベックさんも決して先生とは呼ばれず、信者はみな等しく兄弟、姉妹として自発的に主に仕えています」と話すと一様に驚かれます。多くの方々は私の信仰と職場での働きを理解してくださっています。

結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。（伝道者　12・13）

古屋幸助
一九五三年一月生まれ、東京都出身、
東大和市立第一小・中学校、都立北多摩高等学校、専修大学（経済学部）卒、
一般財団法人日本聖書協会勤務

試練の中でいただいた主の恵み

酒井　正人



妻の美恵さんと

吉祥寺の旧会堂で洗礼を受けてから、二〇一三年十月で二十七年になりました。生い立ち、救いに至るまで、また最初の試練については「光よあれ　九集」に掲載されています。

これといった大きな問題も無く、米国の現地法人の責任者に三十代で任命されたことや、赴任先がニューヨークであったこともあり、奢(おご)り高ぶりがあったことは否めません。また、渡米前に手がけたプロジェクトも本格的設備投資が決まり、知らず知らずのうちに自分の力に頼って判断し、ことを進めることが多くなっていたように思います。いつも自分で計画・実行して、そのあとで「祝福してください＝うまくいくように」と祈るような者でした。救われてはいましたが、主を信じる者として砕かれるべき自我は本当に多く残っていました。

主は、そんな私にも信仰の成長のための大きな試練を用意してくださっていました。

それは、渡米四年目になろうとする時に仕事上の大きな刑事事件が発生して、米国司法当局と対峙しなければならない状況に陥ったことでした。当初は少し楽観的に考えていましたが、弁護士と話し、また静まって状況を見つめ直して、ことの重大性に茫然自失となりました。

食事もほとんど喉を通らず、眠ることもできず、またたく間に五キロほど体重が減りました。責任者としてどうしていいのか分からなくなってしまい、ただ心配するだけで、何の解決策も浮かんできませんでした。こんな経験は初めてでした。このとき、ある兄弟のメッセージの録音テープのことを思い出し、むさぼるように聞きました。その兄弟は、厳しい状況の中で、ベック兄が書かれた『絶えず祈れ』下巻の前書きを読んで、主に支えられたとのことでした。以下は、その前書きの一部です。

「主なる神があなたにおあたえになった
働きをつづけなさい。
嘘つきには、嘘をつかせておきなさい。
組織や制度がくずされるなら、
そのままにしておきなさい。
悪魔には悪事にふけらせておきなさい。
しかし、あなたは、
なにもさまたげがはいらないように気をつけて、
ひたすら主なる神がおあたえになった
働きをつづけなさい。
主なる神はあなたに、
お金持ちになれと命じてはおられません。
主なる神はあなたに、ひとに攻撃されても
自分の性格を弁明せよとは求めてはおられません。
主なる神はあなたに、悪魔とその配下が
あなたについていつわりを言いふらしても、
反論せよとは言っておられません。

そのようなことに夢中になれば、
あなたはそのほかの
ことをなにもしなくなってしまいます。
あなたは主のためにではなく、自分自身のために
ことを行なうようになってしまいます。
あなたはただひたすら、主があなたにおあたえに
なった自分の仕事をつづけなさい。あなたの目標は、
空の恒星のように不動のものでなければなりません。
あなたは、攻撃され、非難され、不当なあつかいを受け、
こばまれ、傷つくことがあるかもしれません。
敵があなたをののしり、
友があなたを見すて、
ひとから軽蔑され、
拒否されるようなことがあるかもしれません。
しかし、あなた自身の人生の目標と、
あなた自身の存在のすべてをかけて、
ゆるがない決意と絶えることのない熱意をもって、
神があなたにあたえられた目標を追求しつづける
ことを、いつも第一に考えるようにしなさい。」

主よ。私は、あなたのさばきの正しいことと、あなたが真実をもって私を悩まされたこととを知っています。（詩篇 119・75）

主が私にお与えくださった働き、その一つは祈りだ、と示されました。早速、翌朝から家内と共に聖書を読み、祈りました。この主の恵みに思わず涙がぽろぽろこぼれてどうしようもありませんでした。思えば家内は、このように心を一つにして祈ることをずっと望んでいたのでした。助け手としての家内に本当に感謝しました。私は、知らず知らずのうちに自分の力に頼ってしまい、主の前にひざまずき、共に祈ることを忘れていました。主は、私の「ぐっ」と握り締めていた拳の指を一本一本のばしてくださっているようでした。この試練は、私を砕くために主がくださったものと確信することができました。

その後、司法省で証言する時も主が背後におられることを確信できました。「自分を弁護しよう」、「うまくやろう」といった思いから解放され、結果をすべて主にお委ねして、平安のうちに臨むことができました。この時、一九九八年三月から家内と毎朝読み始めた聖書は四巡目に入っています。一日一章で、出張も多いのでなかなか前に進みませんが、大切な日課の一つになっています。

仕事の失敗を願う人はいないと思いますが、祈りつつ行えばあとは主が責任を取ってくださるとの確信が与えられて、サラリーマン生活を続けています。主はすべてをご支配なさっており、私たちが主に頼ることを望んでおられます。

二つ目の大きな試練は長男の病気です。右足の動静脈奇形という難病で、二〇〇九年から十二回の入院、延べ二百十日を越える入院日数と九回の全身麻酔手術、二回の血管閉塞手術が行われました。本人はもとより、私たち家族にも厳しい数年間でした。主がいらっしゃらなければ、兄弟姉妹のお祈りが無ければ、この試練を乗り越えることはできなかったと思います。この試練は、主がお許しになったものであり、また私たちに必要なものであったことを、色々な場面で知ることになりました。そのうちの三つのエピソードをご紹介させていただきます。

大学病院で手術を受けることになったのですが、執刀してくださる教授の予定は半年先までびっしり埋まっていました。何とか三か月先の手術予定を組んでいただいたのですが、三か月間も激しい痛みと戦うのはとても難しいことに思われ、手術を早めてもらえないかと祈っておりました。

その日、先生に直接お願いするために、会社を休んで家内と息子と三人で大学病院に出かけました。数

時間待つことはいつものことでしたので、三人で病院の食堂で食事を取ってから、家内と私は病院内の喫茶店へ、息子は同じく病院内のコンビニか本屋に行くとのことで別れました。しばらくすると息子から携帯にSOSが入り、現場に急ぐと、足からの出血でトイレが血の海と化しておりました。

すぐに形成外科から看護師さんが駆けつけてくださり、止血の処置、緊急入院となりました。止血を優先し、ただでさえ痛い患部が包帯できつくまかれることは見るに堪えない状況でしたが、駆けつけて来られた教授の先生がぽつりと、「いそがんといかんな」と独り言をおっしゃるのが横で聞こえました。何も話さない内に、一か月先の手術との予定が組まれました。病院以外の場所での不意の出血ならいろいろなことで相当慌てたでしょうが、最善の場所で主はことを起こされました。本当に厳しい状況でしたが、主が働かれてくださっていることを実感しました。

二つ目のエピソードは手術後の集中治療室でのことです。

手術後の点滴で、使われていた鎮痛剤の乳白色に見覚えがあり、看護師さんに聞くと、会社で私が担当している薬だと分かりました。正確には、その薬の有効成分（原体）を私の会社が製造しているのです。ちょうど息子が授かった二十数年前頃そのプロジェクトが始まったのですが、発売後も販売は芳しくない状況でした。私にとっては、なかなかいい成績を取れない生徒を持った先生のようなものでしたが、最近この薬の需要が少しずつ伸び出していました。この日のためにこの薬が用意され、息子の痛みを取ることに使われていることは本当に感謝でした。主のご計画の偉大さを知りました。

ちなみに、先ほど紹介した、米国に赴任するきっかけとなった大きな投資を伴ったプロジェクトは数年後に中止となっており、自分で育てたと思っていた優等生は会社に大きな負の遺産を残しました。これも「誇ることのないように」との、主のご計画と畏れました。

三つ目は、七度目の手術の時のことです。

何とか温存しようとした息子の右足でしたが、その道も終（つい）に閉ざされ、七度目の手術で足だけを先に天国へ送ることになりました。辛い反面、これが最後の手術となるであろうことに安堵を覚えつつ、手術が成功したことを確認してから出張に出かけました。二日後の夕方五時過ぎに病院に戻ると、先生方が慌ただしくしておられ、「今から、緊急手術です。出血が止まらないため、更に骨を五センチほど切らせてもらいます。時間はかかりません」と言って、手術室へ走って行かれました。

思わず、「主よ、どうしてですか、いつまでですか」とつぶやきました。先生の「時間はかかりません」との言葉とは裏腹に、手術が終わり、病室に息子が戻ってきたのは日付も変わっていた真夜中でした。先生方も昼間の手術を終えた後の緊急手術だったのでかなりお疲れの様子でしたが、私も、精神的肉体的に相当参っており、祈る気力も失せようとしておりました。

しかし、手術後少し落ち着き出したころ、『実を結ぶ命』に載っている、リンデ姉の葬儀でのベック兄メッセージの一節を思い出しました。

「私は、なぜあなたがこのようにお導きになるのか、もはや知ろうとは思いません。また、何ものをも要求したいと思いません。なぜなら、あなたが、すべて最善をなしてくださるからです。また私は、この状態を変えてくださいとも願いません。しかし、唯一のことを願います。どうか、あなたの御臨在を現わしてください」

この時、枕元の小さな読書灯だけをつけていたのですが、その光がイエス様の光のように見えてきたことを鮮明に覚えています。もう、血のにじんだガーゼや包帯、繋がれた多くのチューブや医療機器は目に入りませんでした。主の平安と静けさがそこにありました。

なぜか分かりませんが、この光だけを見つめていれば、このお方に頼れば大丈夫、との確信が与えられるのを感じていました。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。（ヘブル　12・2）

種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。（詩篇　126・6）

これが、この時いただいたみことばです。

主はこんな私にも、色々な試練を通して仕える者としての歩みを導いてくださっています。また、日々みことばを通して支え、多くの恵みをくださっています。この勝利者なる主をただ信頼して、この方から目を離さないで歩んでいきたいと願っています。

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。（ヨハネ　16・33）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

酒井正人（さかい　まさと）
一九五七年生
三重県立四日市高校、三重大学工学部修士課程卒
化学会社勤務
妻・美恵（みえ）、長女・結実（ゆみ）、
長男・翔太（しょうた）、次女・歩実（あゆみ）

いのちの光であるイエス様

酒井　美恵



後列左から結実さん、歩実さん、翔太さん、前列左から美恵さん、夫の正人さん

わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。（ヨハネ　8・12）

私は一九五九年に新潟県新井市（現在の妙高市）に生まれました。イエス様の救いをいただいて三十年になります。私の信仰生活は結婚生活の年月と重なります。そのスタートは主の憐れみそのものでした。私は、一九八四年に主人との結婚に導かれました。生活の場として与えられたところは、集会の兄弟姉妹たちが住んでおられ毎月家庭集会のある、主人の会社の横浜戸塚社宅でした。劣等感のかたまりでうつ症状のあった私の悩みの原因は、心の内にある劣等感でした。私は教会付属幼稚園に勤務していましたが、無力感で悩むようになり、それを正直に周りの方に相談することもできずに、逃げ出すようにして幼稚園を辞めてしまいました。そのことがきっかけで、同じ教会にいた

主人と結婚することになりましたが、私の心の中は、無責任に仕事を辞めてしまった負い目や将来の不安、心配でいっぱいでした。結婚後間もなく、社宅にお住まいの姉妹から家庭集会に誘われ、初めてベックさんとお会いした時、「美恵。イエス様は美恵を愛しているよ」と言われ驚きました。イエス様は、私のわがままの罪の身代わりとして死んでくださったこと、また人の外見や能力を見られるのではないこと、自分の弱さ惨めさを認めてイエス様のもとに来る者を待っていてくださること、などをお聞きしてベックさんの後について祈りました。一週間ほど経った日の夕方、夕食の支度をしながら「私ががんばる必要はない。イエス様が一緒にいてくださり、行く道を教えてくださる」という思いに満たされて嬉しくなり、それまでの不安から嘘のように解放されました。

あなたの神、主ご自身が、あなたとともに進まれるからだ。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。（申命記　31・6）

こうして私は結婚後またたく間に救われ、主人と共にキリスト集会に集うようになりました。社宅での生活は十年間でしたが、三人の子どもたちが与えられ、社宅とその近くにお住まいの兄弟姉妹方と一つの家族のように過ごした、恵みの時でした。多くの方が救われ、横浜集会の礼拝も始まりました。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。（詩篇　133・1、3）

しかし何年か経つと、主人との関係、子育て、集会のご奉仕などのことで私は再び悩むようになり、喜びや平安をなくしていました。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（ヘブル　12・5〜7、11）

結婚十年目を迎える一九九四年に、主人がアメリカ転勤となり家族で渡米しました。私たちが暮らすことになったのは、ニューヨークの近くのニュージャージー州クレスキルでした。私たちは不安でいっぱいでしたが、イエス様は細かいところまで配慮して守ってくださいました。北米の兄弟姉妹方との電話礼拝やニューヨーク喜びの集いも与えられ、主の恵みに圧倒されるばかりでしたが、私は相変わらず思い煩って悩む者でした。しかし主は、そんな私に二つのプレゼントを用意してくださっていました。

一つは、イエス様の十字架の贖いが私自身の罪のためだと体験的に知ることでした。私は、ニューヨーク喜びの集いの後、色々なことが重なって疲れてしまい、イエス様を見ずに回りの問題や自分自身を見て深く落ち込んでしまいました。以前のうつ症状そのものでした。「イエス様に救われて喜びも平安もいただいたのに、今の私は自分の思いにとらわれて身動きできなくなっている。そんな自分がいやでたまらないのにどうすることもできない！」私の心は苦しくて叫び声をあげていました。そんな私をイエス様は憐れんでくださり、電話での祈り会を通して脱出の道を備えてくださいました。私がまさに主の前に叫んだその日に突然デトロイトの姉妹が電話してくださり、初めての電話での祈り会が与えられ

たのです。私は、私の心の内にある重荷を姉妹との祈りの中に注ぎ出すことができました。他の姉妹方もそれぞれに与えられている問題をありのままに祈られました。祈り終わって私は大きな解放感に満たされました。

私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。（詩篇　32・3、5）

それからは毎週祈り会に参加させていただき、姉妹方との交わりやメッセージの録音テープや本を通して主は語ってくださいました。私が何を感じ、何をするかが問題ではなく、主が何を求めておられ、何をなそうとしておられるかを第一にするべきだと示されました。また私の性格的な弱さもイエス様が与えてくださった憐れみのゆえであり、イエス様にいつも繋がっているためである、とはっきり受け取ることができました。

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（2コリント　12・9）

私のうつ状態は、思うようにならない自分や回りの環境に対する反発であり、その根は「自我」であり「罪」であるということが示されました。イエス様の身代わりの死が、どうしようもない惨めな私のためであったことを確信し、喜びに満たされました。それ以来、劣等感やうつ症状で悩むことがなくなりました。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。（イザヤ　53・5）

また私は、主人と二人で祈ることを長い間願ってきました。しかし、そのようにならないのは主人のせいだ、と責める思いがありました。しかし祈りの答えとして、主は結婚の時から二人を一つに見ておられること、また主に信頼して従っていれば必ず夫婦を作り変えてくださる、との確信をいただきました。同時に、それまで主人に対していかに感謝が足りなかったか、素直でなかったかを示され、謝りました。すると不思議なことに、主人や子どもたちへの思いがそれまでとは変わり、心から家族を喜べるようになりました。

その半年後、主人に仕事上の大きな試練が与えられました。その試練を通して、夫婦で聖書を読み祈ることが示され、夫婦の朝の祈り会がスタートしました。

これこそが、イエス様からのもう一つの大きなプレゼントでした。その年の一九九八年十二月に、四年半のアメリカの駐在を終え、私たちは懐かしい横浜の地に戻ってきました。長女は中一、長男は小五、次女は小一でした。私は以前、子育ては親の責任と思い、些細なことで思い煩っていましたが、アメリカでの経験を通して、イエス様が子どもたち一人ひとりに相応しく試練や困難を送って育ててくださり、愛してくださっている、と確信をいただきました。あれから十五年…。それぞれに問題が与えられ、個人的に主と出会う恵みが与えられました。主は一人ひとりを特別に愛してくださり、取り扱ってくださっています。

長男の右足の痛みが右下肢動静脈奇形という難病であるとわかったのは二〇〇九年の春でした。それから二年間にわたって入退院を繰り返し、全身麻酔による十時間以上におよぶ手術が何度も行われ、その度に全国各地、世界各国におられる兄弟姉妹が祈りを

もって支えてくださいました。私たち家族は、一つひとつの出来事の背後に主がおられることがわかり、不思議な平安で守られました。結果的に、息子は義足になりましたが、主は息子を支え守ってくださっています。手術後、痛みは完全にはとれず、とても働けるようには思えませんでしたが、公務員試験に合格し、背中を押されるようにして、心の準備が整う前に働き始めることになりました。いつ辞めてもおかしくない状態でのスタートでしたが、丸二年が経ちました。今は、仕事場近くで一人暮らしをしています。日々、痛みや疲れとの戦いかと思いますが、息子の名前が、イザヤ書40章31節から与えられたことを思うと、主の深い愛を思わずにはいられません。

しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。（イザヤ　40・31）

この数年間の息子との関わりを通して私は、自分の信仰はないに等しいと知らされました。私は、主が必ず息子を祝福してくださると確信して祈っておりましたが、主にすべてを任せて息子の心に寄り添っていることができず、目に見える現実や自分の思い、サタンの囁きに揺れ動く者でした。主の導きを祈りながらも、自分の考えを押し付けて無言のプレッシャーを与えていたように思います。私は、息子を愛することも、主に信頼することも、祈り続けることもできない者であると痛感しました。

あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。（黙示録　3・17）

イエス様の十字架は私の罪の故であると一度は確信し、解放された喜びに満たされていましたが、いつの間にか信仰の正しさで歩もうとして苦しくなっていました。自分の内側を見れば絶望するしかない者ですが、主は「あなたはすでに死んでいるよ」と示してくださり、御霊が私の内に働いてくださっていることを、みことばによって実感できますから、感謝です。

あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。（コロサイ　3・3）

しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。（2コリント　3・16〜18）

振り返ってみれば、私が迷う時、悩む時、いつも主が光をあててくださり、必要な助けを与えて導いてくださったと感謝でいっぱいになります。イエス様とお会いできる日を楽しみに、まだ救われていない家族や、友人、知人の方々が、永遠のいのちをいただける日を待ち望んで祈っていきたいと願っています。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。（ヘブル　12・2）

酒井美恵（さかい みえ）
一九五九年生　新潟県立新井高校、新潟青陵短期大学幼児教育学部卒
夫・正人（まさと）、長女・結実（ゆみ）、
長男・翔太（しょうた）、次女・歩実（あゆみ）

イエスさまを知ることは知識としてのキリスト教とはまったく違いました

望月 真澄



中央が真澄さん、ご家族に囲まれて

私は一九四三年に静岡県で生まれ育ちました。

最初に聖書のみことばに出会ったのは、東京でキリスト教系の短大に入学してからです。毎日、礼拝があり「キリスト教学」が必修でした。けれど私は現状にほぼ満足して楽しい日々を過ごしており、また何の根拠もないのに未来はもっと素晴らしいだろうと「のんき」に暮らしていましたから、みことばはまったく心に届きませんでした。

次は自分の結婚式を通してです。主人の父は一九二七年に静岡市のメソジスト教会で洗礼を受けた元クリスチャンでしたが、その後父の人生にいろいろのことがあったらしく信仰から遠のいていたのです。しかし一人息子が結婚すると決まった時、どうしても教会で式を挙げてほしいと申しました。そして自ら披露宴会場に近い神田の教会に式をお願いしてきたのです。それで牧師先生から少し聖書のお話を伺いましたが、上の空でしたのでほとんど覚えていません。でも当日、教会は美しい花々がいっぱいで、信者さんたちが見ず知らずの私たちのために素晴らしい笑顔で賛美歌を歌ってくださり、なんと温かい雰囲気かと感激しました。主人の父は満面の笑顔でした。

そして時は過ぎました。私たちは主人の転勤に伴って何度か引っ越しをし、いろいろな町に住んで忙しく暮らしました。家族は五人になっていました。

とにかく元気で活動的だった主人は、仕事は忙しかったのですが、日曜日には早起きをして家族を引き連れ近郊の山々へよくハイキングに行きました。いつもかなりの強行軍でしたが、皆それに馴らされていました。冬はほぼ毎週スケート通いでした。

そんな時に主人に大腸の癌が見つかったのです。当時、癌はまだまだ死の病と思われていましたので私は主治医と相談をして、病名を隠しとおそうと決めたのです。家族の前では平静を装い、ただ開腹手術でポリープを取っただけということにしたのです。そのほうが主人の闘病にも良い結果になるだろうと思ったからです。

けれどもそれは想像以上に大変なことでした。本当のことを誰にも言えないので、毎日がつらく灰色で、世界がすっかり違って見えました。その上リンパにも転移があったという事実が重くのしかかってどうにもならないのです。食欲がまったくなくなり、夜は眠れません。昼寝をして補おうとしても、頭の中のどこかが壊れているような感じで休むことができないのです。

一方主人の方は明るく前向きで、術後三か月目には海外出張も再開していました。ホテルの温水プールで泳いだと言い、よほどうれしかったのでしょう、「もうこれで全快だ」などと得意の笑顔なので、こちらはただ息ばかりでした。

そのうち私の心と体がどうにもならなくなって昔からの親友に電話し、本当のことを話しました。それが毎日のように続きましたので今度は親友が耐え切

れなくなり、彼女から主人に直接電話がなされ、すべてが明るみに出されました。連れて行かれた病院では「典型的なうつ病です。必ず治ります」と言われ、適切な治療によって回復しました。

けれど主人の癌は二年後には再発し、手術と抗癌剤治療を繰り返しましたが、結局、一年八か月後に亡くなりました。お葬式では多くの方々にお世話になり、ご迷惑もおかけしました。また親しい方々からたくさんの慰めや励ましを頂きましたが、私の心はすっかり狭くなっていて、幸せな人たちにこの気持ちは解るわけがないと、とがっていました。皆様のご厚意を素直に受け取ることすらできない頑（かたくな）な状態でした。ただ子供たちと過ごす時と場所だけが安全で安心のように思えたのです。

それからしばらく経った頃、ふと主人の勤め先で同期だった方が五年前に亡くなり、私がそのお葬式に伺ったことを思い出しました。その奥様とは直接お会いしたことはありませんでしたが、なぜかお話ししてみたくなりお電話をしてみました。その方はすぐに会ってくださり、「これからどう生きていったら良いのか解りません」という私に、「私はクリスチャンになりました」とおっしゃって、イエス・キリストの福音について話してくださったのです。不思議なお話でした。内容はよく解らなかったのですが、どうしてか、「もしかしたら、まだ希望があるのかもしれない」とぼんやり思いました。

それから日曜礼拝、火曜の学び会と集ってみましたが、それまでの自分の知識としてのキリスト教とは全然違ったのです。これは普通ではない、特殊な世界だ、とてもついていけないという思いと、ではその「普通の世界」に頼って生きていけるのかという疑問との繰り返しの中で、『光よあれ』とか『絶えず祈れ』を読んでいました。

同時に、淋しくなった家族を盛り上げようと、皆でよく小さな旅行をしました。夜はトランプゲームに興じて「これも幸せの一つだな」などと思っていました。でもそれはごく一時的な喜びに過ぎませんでした。本当はもっと恒久的な永遠に変わらないものを求めるべきではないかと、どこかで考えていました。

そうこうするうちにちょっと不思議な感覚を体験するようになったのです。夜眠りにつく頃、「信仰を持たねばならない、他に道はない」という思いが波のように押し寄せてくるのです。そんなことが何度かありました。そしてだんだん、これはもう抗（あらが）えないなと自然に思うようになったのです。後で知ったのですが、集会の皆さんが熱い祈りをしてくださっていたのでした。感謝でした。その頃支えられていたみことばです。

あなたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の主。あなたの贖い主は、イスラエルの聖なる方で、全地の神と呼ばれている。（イザヤ　54・5）

このようにして新しい希望を頂くことができました。しかし、悔い改めに導かれたのはずっと後のことです。

私は、主人とは気の合う仲の良い夫婦だったと思っていたのですが、それは主人が忍耐してくれていたのだと、ある日突然気づいたのです。また、主人の病気が進んで絶望的な頃、私には思いやりがまったく足りませんでした。ただ、「自分はこの先どうなるのだ、こんなはずではなかった、どうしてくれるの」と心の中で叫んでいたのです。それが本当の私の姿でした。どこまでも自分が一番大切だったのです。恐ろしさに身の縮む思いでした。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。（ローマ　7・15）

これをきっかけとして、自分でもどうにもならない、わがままな、自己中心の生活が走馬灯のように思い起こさせられて、つらい日々が続きました。家族にも周りの人たちにもどれだけ迷惑をかけてきたかわかりません。が、次のみことばに出会って、はっとさせられました。

先の事どもを思い出すな。昔の事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。あなたがたは、それを知らないのか。確かに、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける。

（イザヤ　43・18〜19）

私はただ、自分が夫という後ろ盾を失って、淋しく心もとないので、それを補っていただくような気持ちでイエス様を考えていました。けれどもイエス様は、そんな中途半端なかかわり方で満足なさる方ではありませんでした。もっと人間の本質の根幹にメスを入れてこられます。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――

（エペソ　2・4〜5）

イエス様の救いは、罪から抜け出すためのものだったのだとようやく気付いたのです。そしてそのためにはイエス様の十字架がどうしても必要でした。もしもイエス様を知らないでいたら、一生自分の罪に鈍感なまま、悔い改めのないままで生涯を送ったことと思います。月並みな言葉ですが救われて本当に良かったと思います。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

（詩篇　119・71）

その後のことですが、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」（使徒16・31）のみことばどおりに主は確かにこの者の家族にも働きかけてくださっています。主のみわざに感謝いたします。

毎日の生活ではいろいろなことが起こり、苦しいことも悲しい日もあります。が、すべては主から発していることですから、何とかしてこの道からそれずにこの集会という有機体の中で皆様とともに真っ直ぐ最後まで歩きとおしたいと願っています。

幸いなことよ。あなたが選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人は。私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮の良いもので満ち足りるでしょう。

（詩篇　65・4）

望月真澄
一九四三年静岡県生まれ
静岡県立富士高等学校
青山学院女子短期大学卒業

苦しみは恵みのためでした

橋本　至芳



至芳さんを囲んで、夫の耕太郎さん、長男の義徒くん、次男の蒔徒くん

私は一九七七年に宮崎市で五人姉弟（姉一人、弟二人、妹一人）の次女として生まれました。当時両親は飲食店を営んでいましたので、食べることが大好きだった私は父が働いている厨房に入ってつまみ食いをしたり、料理を作る工程をじっと見て過ごすことが多かったと記憶しています。

両親は店舗付き住宅を購入しましたが、ちょうどバブル期ということもあり、ローンの残高も金利も高く、朝から晩まで働いていました。しかしどんなに働いても経済的には楽にならず、次第に父と母の間にはすれ違いが生じ、言い争いをすることが多くなりました。ケンカが始まると、私は姉と一緒にベッドの隙間に隠れたり、母が荷物をまとめて家を出ようとするのを泣きながら止めることもありました。家庭の雰囲気はとても暗く、今にも砕けそうなガラスのような家族でした。

小学二年生のころ、すでに吉祥寺集会に集っていた母の妹である武井生子（たけい　しょうこ）姉妹が、当時小学五年生だった姉を夏休みの一ヶ月間、東京に招待してくれました。そこで姉は主イエス様に出会い、たくさんのお交わりや家庭集会を体験して帰ってきました。帰ってくるなり、いつもはおとなしい姉が母に「おばちゃんたちみたいに明るくなってほしい」と、泣いて訴えました。もう限界だったのだと思います。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。

（哀歌　3・22〜23）

その一年後に母が東京に招待され、イエス様の救いに与かりました。母を空港に迎えにいった際、母が私たちを見るなり「イエス様ばんざい！」と両手を挙げて叫んだのを覚えています。母は救いの喜びで溢れていました。それ以来、家の中が少しずつ変わっていきました。録音されたベック兄のメッセージや賛美歌が流れ、一年後に父が救われ、家庭集会がもたれるようになり、たくさんの兄弟姉妹たちが全国各地から来てくださるようになりました。

そして私自身は、家族を変えてくださったイエス様が大好きという思いで、中学二年生のときに大牟田キャンプで洗礼を受けました。しかし、そのときは十字架の意味も知らず、また自分が罪人でどうしようもない惨めな人間だとはまったく気づいていませんでした。自分の罪の性質と向き合うようになったのは子育てを通してでした。

子育てについて

私は二〇〇五年に橋本耕太郎さんと結婚し、二〇〇七年十一月に長男義徒を出産しました。子どもが大好きだった私は、出産前まで色々な育児書を読んで、

育児を心待ちにしていました。しかし、長男はやや小さめに生まれたためかミルクを飲む力が弱く、一度に少ししか飲めないため深く眠ることができず、泣くかぐずるかを繰り返しました。授乳は一時間おきになり、泣き止まない間は部屋中を抱っこして歩き、添い寝をしながら眠るのを待っていましたが、やっと眠っても一時間後には泣き出すという日々でした。一度泣くと一～二時間は泣き続けるのでご近所迷惑かと思い、早くから家のシャッターを閉め、ぐずると大変なので外出もしなくなり、家庭集会も控えるようになりました。

次第に極度の睡眠不足となり、家事が思うように進まないこと、自分の時間がまったく取れないことに強いストレスを感じ、泣き声を聞くと息苦しくなり耳を押さえました。市役所や子育て相談室へ行くと「お母さん、もう少し頑張って」と言われ、何の解決にもつながりませんでした。精神的にも肉体的にもギリギリで、ようやく寝たわが子を見ては可愛いと思うどころか、「あなたのせいで私は病気になりそうよ！」と声を殺して泣きました。

母は未信者のころ、思い通りにならない姉と私に感情をぶつけて叩いた時期がありましたが、救われてからは一度も手を上げることはありませんでした。しかし、私は、信仰があるにもかかわらず、無抵抗の子どもに手を上げ怒鳴りつけるひどい母親でした。今思い返すとほとんど育児ノイローゼだったと思います。主人を初め、両親や祈り会の姉妹方が私たちのことをどれだけ祈ってくださったでしょうか。もし祈りの支えがなかったら、祈ることを知らなかったら、振り上げた手を主が止めてくださらなかったら…と思うと感謝しかありません。

なぜ主はそのような試練をお与えになったのか。それは間違いなく「私を砕くため」でした。そのような状態に陥った根本的な原因は「子ども」にではなく、

「自分自身」にあったのです。私はどのような状況でも自分の意志を突き通し、自分だけの時間を大事にし、思い通りに生きて来ました。だめな自分を見せたくないという気持ちも人一倍強かったと思います。しかし、主イエス様は「頑張らなくていい。努力しないでいい。ただ私に頼りなさい」とおっしゃってくださいます。私は、「他の母親にできることが自分にできないはずがない」と肩に力を入れ、「子育てって楽しいよね」と取り繕い、主に頼っていると言いながら自分の努力で改善できると思い、この世の知恵を得ようと走り回っていました。

だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

（ヤコブ　2・14）

そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。

（ヤコブ　3・15）

私たちの道を尋ね調べて、主のみもとに立ち返ろう。

（哀歌　3・40）

自分の惨めさ愛のなさを気づかされ、育児や家事についての自分の考えを捨てて主に降参したとき、子どもの夕暮れ泣きや夜泣きが減っていきました。そして出産してから一年後に主に示されて断乳し、初めて四時間の睡眠がとれました。それからは親子ともども少しずつ気持ちが安定し、外出もできるようになりました。

それまでの時期は苦しいものでしたが、不思議と同じ境遇で悩むお母さんたちから相談を受けるようになったり、幼稚園主催の子育て講習会で証しをする機

会をいただいたりしました。主の憐れみであり慰めであったと思います。この経験がなければ、相談されても軽く受け流していたか、無神経なことを言って子育てに悩むお母さんたちを傷つけていたかもしれません。主は私の愛のなさ、傲慢を見抜かれ、子育てという大きな試練を通して、「主イエス様」を中心とした生活の大切さを教えてくださっています。子どもたちも一日でも早く主と個人的に出会い、主に祈り、答えをいただく日々を送って欲しい、と心から祈っております。

突然のリストラ、新しい導き

二〇二一年十一月末、当時主人が勤めていた会社の部署が突然解散となりました。事実上のリストラでした。それまでも早期退職の募集やある年齢以上の方々を対象としたリストラは行われていましたが、まさか部署が解散になるとは思ってもいませんでした。大変ショックでした。当時の家は社宅のようなものでしたので、仕事と家を同時に失うことになり、頭の中が真っ白になりました。「私たちはこれからどうすればよいのか分かりません。あなたの御心を分かるようにお示しになってください」と夫婦で祈る日々が始まりました。「主が必ず用意してくださる」と頭では分かっていても、現実を見ると不安になり落ち込みました。

ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。そういう人は、主から何かをいただけると思ってはなりません。（ヤコブ　1・6〜7）

そんな私たちに主は、同じ会社で先にお辞めになっていた集会の兄弟を初め、たくさんの方々とのお交わりを用意していてくださいました。私たちはまず何をすべきかを示されました。そして自分たちの思いが強すぎて主の祝福の邪魔をしていたことに気づかされました。

今の家が与えられたのはその数日後のことです。紹介された家の場所は元々畑だったのですが、そこには小さな鳥居があったそうです。不動産会社がその土地一帯を購入する際に鳥居を移動したということですが、鳥居があったということで敬遠され、周りの家が売れていく中でこの家だけがなかなか売れず、家が建ってから約一年が経過していました。キャンセルが続いたことや年度末の決算時期ということで大幅に値下げしていただけるとのこと、またモデルルームとして使用されていたので、置かれているソファーやテーブル、二段ベッドなどの家具やその他多くの備品などもすべていただけるとのことでした。鳥居を取り払って建てられた家ですので、大抵の人は「罰が当たる」と購入をためらうのでしょう。しかし、それこそ主が私たちに備えられた家であり、主が導いてくださったと確信いたしました。不動産会社の担当者の方がクリスチャンだったということも不思議な導きでした。集会や実家へは車で十五分ほどで行くことができ、子どもの幼稚園も以前と変わらないまま自転車で通える範囲で、何もかもが主に整えられておりました。こうしたことから、主人のリストラは主によって計画されたものであり、主は住まいも用意してくださり、私たちが購入できる価格にしてくださった、と主のご計画の完璧さと憐れみに、驚くとともに深く感謝しました。

わたしは彼らを幸福にして、彼らをわたしの喜びとし、真実をもって、心を尽くし思いを尽くして、彼らをこの国に植えよう。（エレミヤ　32・41）

なぜこのような何の取り得もない心の貧しい者を主が選んでくださったのか、いくら考えても分かりま

せん。だから毎日、「イエス様、今日は何をすればよろしいでしょうか。今日も一日あなた様にご支配いただきたいです。よろしくお願いいたします」とお祈りしています。

ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。（ルカ　10・20）

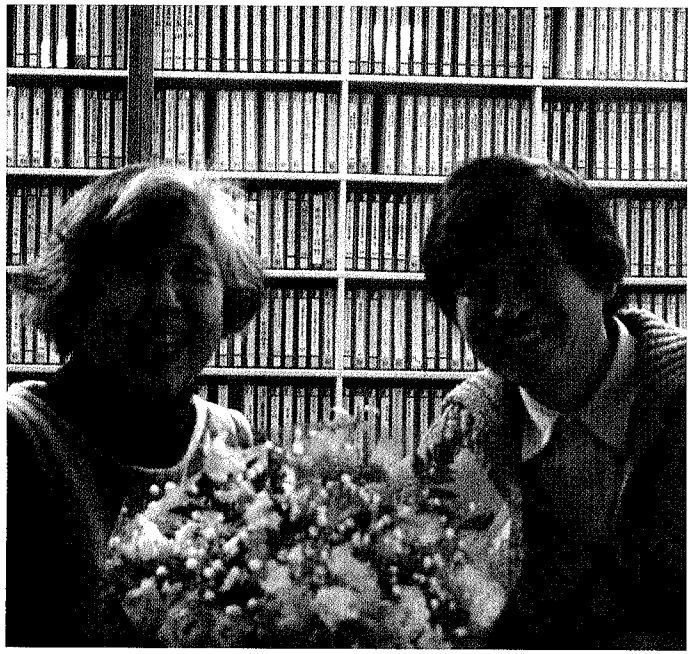
信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。（ヘブル　12・2〜3）

あなたが自分の目で見たことを忘れず、一生の間、それらがあなたの心から離れることのないようにしなさい。（申命記　4・9）

橋本至芳（はしもと　しほう）
一九七七年宮崎県生まれ
宮崎北高等学校卒業
夫／耕太郎、長男／義徒、次男／蒔徒

主の憐れみによって生かされる

森島　左武郎・久仁子



私・左武郎は一九四五年、敗戦の年に疎開地で五人兄弟の四番目として生まれました。上に姉、真ん中に三人の男兄弟そして一番下に妹です。小学校時代にイエス様を紹介されて五十九年、教会学校で家内と知り合い、就職一年後に結婚して四十五年、四人の娘と七人の孫が与えられました。仕事は建築・家具内装デザイン一筋で四十二年、恵まれた職場でした。定年退職して四年が経ちました。

左武郎の両親の導きは、九州のえびの高原でのキャンプでした。そのとき父は、病気の検査結果待ちでしたが、救いをいただきました。結果は大腸癌でした。一九九三年、父は召されました。葬儀は、ベック兄に来ていただいて行なわれました。近所の方々がたくさん来

てくださいました。

母は、えびの高原でのキャンプから帰宅して脳出血で半身麻痺になりました。不自由な身体でしたが、車椅子で集会や喜びの集いにも参加できました。一九九四年に受洗の恵みをいただきました。

両親は共に御代田の納骨堂で、家内の両親と次女の夫・精(すぐる)さんと一緒に主イエス様の来臨を待っています。私たちの両親はともに、晩年に病いや悩みを通して約束のとおり救いにあずかり、安心して天国へ帰りました。

私・久仁子の母も三度目の脳梗塞で倒れ、一九九二年召天しました。そのとき父は、母の葬儀を集会ではなく教会ですると決めました。私の知らない教会でした。父は集会には出席しなくなり、一ヶ月後に母の納骨を済ませると、教会で知り合った女性と住むようになりました。その後十年間会うことはありませんでしたが、「大腸癌になったので世話をして欲しい」と連絡がありましたので、主が与えてくださった和解の時と受けとめました。二年後、父は召され、集会で葬儀をしていただきました。両親ともに御代田の福音センターに納骨させていただくことができ、主に感謝しました。

父のマンションを整理した時に集会の出版物や聖書を持ち帰りましたが、父と同居されていた方の息子さんのお嫁さんが教会員と聞き、集会の出版物をお礼にお渡しすることができました。その方は「アメリカ在住の妹さんが求めているので送りたい」とおっしゃいました。父の召天後三年過ぎて、集会のあるご兄弟がアメリカのオクラホマに赴任されましたが、本を送りたいお方としてお聞きしていた妹さんがその近くにおられました。父に渡していた本がアメリカの一人の姉妹に届いていたのです。主は父を用いてくださいました。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。

主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。

(哀歌　3・22〜24)

というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

(ローマ　11・36)

10 人の証し

Unser HERR lebt

私たちの四人の娘は子供の頃はみんなイエス様大好きでした。揃って、高知の物部川で洗礼の証しの恵みにあずかりました。しかし、成長するに従って、私たちの中にあった暗闇が明らかにされたように、前後して、主は娘たちを光の中へ引き出されました。

三人の娘たちは、家出というかたちで親元を去って行きました。次女は十九歳、三女は二十四歳、四女は十八歳の時でした。私たち親はどうすることもできませんでした。ベック兄にご相談すると「祈りの結果でしょう」というお返事でした。その時は「えっ！」と思いもよりませんでしたが、後になると「そのとおりです」と受け取ることができました。

神よ。まことに、あなたは私たちを調べ、銀を精練するように、私たちを練られました。あなたは私たちを網に引き入れ、私たちの腰に重荷を着けられました。あなたは人々に、私たちの頭の上を乗り越えさせられました。私たちは、火の中を通り、水の中を通りました。しかし、あなたは豊かな所へ私たちを連れ出されました。

(詩篇　66・10〜12)

神は悩んでいる者をその悩みの中で助け出し、そのしいたげの中で彼らの耳を開かれる。

(ヨブ　36・15)

陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた。（エレミヤ　18・4）

まず、一九九九年に次女の汀が家を出て行きました。大学も中退して、六年近く音信不通になりました。佐藤精（すぐる）さんと結婚したとの葉書を受け取り、私たち二人で祈って、聖書と花束の贈り物を持って訪ねました。一九九九年、長女の望が、同じ職場にいた狩俣幸男兄との結婚が決まり、御代田福音センターで結婚式を挙げさせていただきました。このとき、私たちの家族は全員揃うことができました。精さんも二ヵ月の息子・心（こころ）とともに出席してくれました。

あくる二〇〇〇年、四女の碧が大学受験前に突然家を出て行きました。私・久仁子は不信仰そのものに陥り、現実に打ちひしがれましたが、私の悲しみを目の前に見て、汀に悔い改めが与えられました。

汀は、その日から幼い「こころ」と二人で精さんの救いを祈り求めるようになりました。半年後の神戸キャンプで「こころ」の祝福式がとりおこなわれましたが、このときに精さんはベック兄から福音をお聞きして、すぐに救いを受け入れました。その後、長女賛（たたえ）が与えられ、続いてメサイヤコーラスに参加するようになり、また日曜学校の奉仕などと喜んで歩んでいました。

しかし、二〇〇九年十一月二十二日、精さんは四十二歳で召天いたしました。「こころ」が小学四年生、「たたえ」は幼稚園でした。最後の入院は一ヵ月半でしたが、あっという間に天国へと召されました。その入院中、よく見えない目で、家族と親族一人ひとりへの遺言を携帯のメモに打ち込んでいました。またベッドで証しも吹き込みました。芦屋集会所での葬儀では、遺言どおりメサイヤのハレルヤも演奏され、四百人くらいの方々が主の福音と賛美をいただいて帰られました。主は、家族全員を葬儀に集めてくださいました。

イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」（ヨハネ　11・4）

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」（ヨハネ　11・25〜26）

汀は、精さんとの天国での再会を心待ちにしながら、二人の子供たちと心合わせて歩んでいます。娘・「たたえ」は毎日の祈りで「イエス様、お父さんは天国で元気ですか、私は元気です。私はお父さんに逢いたいです。早く迎えに来てください」と祈っています。また息子の「こころ」は学校の友だちに「おまえのお父さんは死んだんやろ！」と言われると、「違う、死んでなんかいない、天国で生きている」とはっきり言っているそうです。二人の小さな口を用いて主は大胆に語ってくださいました。

私たちも、愛する精さんの病と死をとおして、みことばの真実を体験することができました。よみがえりのイエス様によって死は勝利にのまれており、死は終わりではなく、始まりであると確信することができました。それは精さん自身が最後にいたるまで希望を持って平安に凱旋するのを見たからです。彼がそれを私たちに見せてくれたからです。主が精さんを用いてみことばの真実を現わされました。

三女の馨は、調理師としての専門学校を卒業してから、レストランに勤めていました。しかし、色々と間

題も与えられて退職し、碧の家出の後一年して突然、家を出て行きました。その十一年後に妊娠がわかりました。私たちは祈りながら、六ヶ月の身重で、問題を持ったままの馨を引き取りました。元気な赤ちゃんを産むことだけを思いながら、日々の祈りの中での歩みでした。すぐに病院を与えられて、主が用意してくださった憐れみを感謝しました。

二〇二三年十月に無事男の子が与えられ、感謝しました。私・久仁子は毎回病院へ付き添って行きましたが、出産間際の陣痛室で一緒に祈りながら過ごせたことは感謝でした。生れてすぐの赤ん坊が私に手渡されましたので、馨の処置を見守りながら三十分ほど抱いていました。大きな病院でのこのような体験は、主が特別に与えてくださったのだと思いました。馨は主に愛されている、と分かり、主の憐れみが迫ってきて涙が溢れました。馨は、長男を真音（まおと）と名付け、シングルマザーとして私たちと生活しています。馨は、私たちのところに帰ってきてからは、出産までの期間も集会や家庭集会、火曜の学び会に共に出掛けていましたが、「まおと」が二ヵ月になった時からは「まおと」といっしょに集会に集っています。芦屋集会のご兄姉の祈りや交わりで助けられています。

馨の出産の知らせを娘たちに電話したところ、「四度目の赤ちゃんが与えられることがその日にわかった」と長女の望から聞かされました。私たちは四度目の帝王切開のことを心配しましたが、望は、「主が与えられたいのちだから、主はすべてをしてくださる、大丈夫」と言うのです。その通りに、無事に第四子を出産しました。感謝でした。私・久仁子は望の出産にあわせて一ヶ月東京へ行っていましたが、この間、主は左武郎と馨との対話のときを与えてくださったことも感謝でした。望も、四子潤太が与えられ日々の生活は大変だと思いますが、ご兄姉がたの祈りに覚えていただき、また幸男兄や優太・こみち・虹太の三人の子どもたちにも助けられています。私たちのために、家族のために、たくさんの兄弟・姉妹のお祈りをいただき、心から主に感謝しています。

四女・碧も結婚して、今では四人の姉妹たちはよく行き来し、交わりを持つようになりました。感謝しています。

私・久仁子は、問題が与えられるとすぐには主に信頼できず、心配や不安を持ってしまいます。自分の思いを捨てて主を見上げることをしないで現実を見て、目に見える事柄に捕らわれてしまうのです。しかし、そのようになるのは、主の栄光を求めるのではなく自分が報われたいと思っているからだ、と気づかされています。そのような私に、主は何度も訓練を与え、主イエス様だけに頼りなさいと導いてくださっています。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。

（ローマ　7・15）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。私は神の恵みを無にはしません。

（ガラテヤ　2・20〜21）

一九九五年一月十七日に、阪神淡路大震災が起こりました。震度七の揺れでした。その頃は、主人のこと、娘のことで私の信仰も肉体もボロボロでした。それに加えて地上のものも壊されて、何もかもが失われたと思いました。ところが、その日ベック兄から「今の信仰の思いについて書いてください」との原稿依頼がファッ

クスで届きました。自分のことではなく、主が何をしてくださったかということに目を向けることの大切さを気付かせていただきました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。
（1テサロニケ　5・16〜18）

主は「見たことを忘れないように」、また「わたしが将来と希望を与える計画をわたしがあなたのために立てる」と言われました。しかし、何か問題があると、私たちの主な関心は解決であり、目に見える答えを求めるものでした。目に見える結果だけで、主の恵みを推し測ろうとしてしまっていました。

しかし、本当に大切で、忘れてはならないのは、荒野のただなかで共に歩んでくださる主であり、先を進んでくださる私たちの主ご自身だと気づかされています。これまでの歩みを通して私たちは、主を見失うと何をしてしまうかわからない者であること、交わりの中に居続けることの大切さを痛感しています。問題や悩みの真っただなかにあっても、イエス様が共にいてくださるから大丈夫、苦しむこと、悲しむことがあっても主が共に担ってくださる、と確信して歩み続けたいと思います。不信仰な私たちにとってはいつも、十字架のイエス様こそ解決、答えそのものに他なりません。

私たちは、今はひとつにされて歩む訓練をいただいています。頑なな者同士が主にあってひとつにされ、共に尊敬し、愛し合うようにと訓練を受けています。二人で一緒に祈り、お見舞いに伺い、主の集会に参加できます。思いは違っていても共に祈ることが与えられています。主の憐れみに感謝しています。

あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたや、あなたがたの子どもたちを養いましょう。
（創世記　50・20〜21）

強くあれ。雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主ご自身が、あなたとともに進まれるからだ。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。（申命記　31・6）

主よ。早くおいでください。お待ちしています。

森島左武郎（もりしま　さぶろう）
一九四五年生まれ　西宮市立高木小学校、甲陵中学校、県立鳴尾高校
京都市立美術大学卒業　日建設計を経て日建スペースデザイン退職

森島久仁子（もりしま　くにこ）
一九四四年生まれ　神戸市出身　現在西宮市在住
神戸松蔭女子学院中・高・短大卒業

求めなさい。そうすれば与えられます

伊藤　さをり



右から さをりさん、義母の智子さん、義妹の栄子さん

今から約八十年前の雪の降る季節に、高知県東津野村と呼ばれていた山奥に外国人の宣教師の方が来られて福音が伝えられました。初めに父、その後に母がイエス様を受け入れました。幼いころは母と一緒にお祈りし、「イエス様を信じていたら天国に行けるよ」という母の言葉を素直に受け止めていました。

まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。（マタイ　18・3）

私は六人兄弟の末っ子として生まれました。中学・高校とミッションスクールでしたので、みことばを耳にする機会は多かったのですが、イエス様からはどんどん離れていきました。窮屈になることを恐れ、クリスチャンにはならないと固く思っていました。

一九八二年に主人と結婚しました。結婚して初めてのお正月を主人の実家で過ごすことになりました。主人の実家では義母が毎日仏壇にご飯をあげ手を合わせていました。このことも私には驚きでしたが、お正月に家族全員が並んで、神棚と仏壇に手を合わせるという習慣に本当にびっくりしました。私はまだ信仰も何もなかったのですが、あわてて二階にかけあがり、そこで初めて「神様助けて！」と叫びました。すぐに主人が来て「かたちだけだから」と言ったのですが、私にはできませんでした。台所にいた義母に「お義母さん。すみません。私できないんです」と言うと、義母は「あなたのおうちはそうだったわね」と…。それからは何も困ることはありませんでした。かえって、わがままな私をいつも受け入れてくださいました。（この習慣は、今はまったく閉じられています）

結婚して二年後くらいに子どもを授かりましたが、流産しました。傲慢な私はそれまで、今の世の中子どもはいらない、と思っていました。ところが、流産したことにより急に子どもがほしくなり、ずいぶん悩みました。病院にも通いましたが卵管の通りが悪いから難しいと言われました。その時ふと、聖書の中で年老いた夫婦に子どもが授かったという話を思い出しました。創世記のアブラハムとサラの話です。私は久しぶりに聖書を取り出して創世記から読み始め、次のみことばを見つけました。

主に不可能なことがあろうか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子ができている。

（創世記　18・14）

この時から神様に祈るようになりました。それからまもなく長男が与えられ、二年後に長女も与えられました。祈って与えられた子どもでしたが、子育てにおいても悩みました。ご飯を食べさせるとか必要なこ

とはするのですが、子どもと楽しく遊ぶということは苦手でした。私のできないことを主人が助けてくれました。子どもが幼稚園くらいのころ私は、「今死んだら天国に行けるだろうか」という不安な思いにかられるようになりました。それは真っ暗闇の大宇宙に放り出されたような恐ろしい何ともいえない恐怖でした。その思いにかられるたびに「神様もうちょっと待ってください」という叫びをしていました。死の恐怖は個人的にイエス様に出会うときまで続きました。

これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

（ヘブル　2・14～15）

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている・・・

（ヘブル　9・27）

父が元気なころ、電話をかけてくるたびに、「さをり、聖書に真理がある」とそれだけ言って母に電話を替わるのです。ほかのことは何も言わないのです。初めは、いつも同じことを言っていると思っただけで、とくに気にも留めていませんでしたが、死の恐怖に襲われるようになってからは父のことばが心にとどまり、「確信を与えてください。真理を教えてください」と祈るようになりました。

教会にはそれまで何度か行ったのですが、いつも失望していました。また、すでにキリスト集会に導かれていた姉の基子から集会の本が送られてきていたのですが、私には集会と教会の区別がつきませんでした。ですから「神様、教会には行きたくないのです。私が行けるところに導いてください」と祈りました。

一九九一年の正月、私は「神様、今年こそはあなたを確信できますように。クリスマスまでにお願いします」と祈りました。その年の六月に父が交通事故に遭い、

高知の実家に帰りましたが、その時ちょうどベックさんが納骨式のため高知に来られていました。そして姉に勧められるままにベックさんにお会いしました。まず初めに私が話したことは「教会には行きたくないのです」ということでしたが、ベックさんは「教会に行かなくてもいいよ」と言ってくださり本当に安心しました。話し始めてから涙がとめどもなくあふれてきました。ベックさんは、「さをり、今死んだら天国に行く確信はありますか?」と尋ねられました。私は「それは…自信がありません」と答えました。これこそが一番の悩みでしたからそのように尋ねられたことに本当に驚きました。この集会に集いたいと思いました。祈りは聞かれ、このようにしてイエス様を信じさせていただきました。この時から一度も死の恐怖に襲われたことはありません。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。

（マタイ　7・7）

その年の九月一日から札幌キリスト集会に集うようになりました。十月に旭川で初めての喜びの集いがあり、私は罪のことなど何もわからないまま受洗しました。こうして集会に集っていましたが、しばらくの間は、聖書に忠実に、そしてメッセージに忠実に歩むことを目標としていました。しかも、いま思うと本当に恥ずかしいのですが、少しくらいはできていると思っていました。「良い子にならなくてもいいよ…どうせなれないから」と言われたのに、知らず知らず良い信仰者になろうとしていたのでした。

また、私はいつも自分を見ていました。そして誰かにいやな思いをさせたこととか、そういったことが気になって、よく謝っていました。イエス様にも祈るのですが人にも謝らないと落ち着かなかったのです。そんなわ

けで、謝らなくてもいい時に謝ったこともあります。その反面、本当に傷つけたことにはまったく気づかないこともありました。偽善者そのものでした。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。（ローマ　7・18）

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。（1ヨハネ　1・7）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（1ヨハネ　1・9）

またその頃は、私の中にイエス様（御霊さま）が住んでくださっていることをまったく知りませんでした。二〇〇九年くらいに、主の憐れみと恵みにより、ある兄弟とのお交わりを通してその事実を知りました。

わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。

その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。（ヨハネ　14・16～17）

私は自分からの解放を切に求めました。しかし、いつも自分中心になり自分にうんざりすることが続きました。

ある時こういうことがありました。夜中にふと目が覚めて、急にある姉妹に言ったことを思い出しました。あーまた余計なこと言ってしまった。もうどうやっても私は直らない。私自身は変わらないことを気づかされました。結局、自分は自分のことしか考えられない者であり、イエス様の妨げしかできない者であることを思い知らされました。その時にふとこのみことばが浮かびました。

私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。（ローマ　8・12）

「あー、私は責任を負えないし、負わなくていいんだ…そのための十字架なんだ」と思わされて楽になり、心から十字架に感謝しました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

ダメな者だからイエス様が必要だったこと、よくなる見込みがないから十字架にかかってくださったことなど、多くの失敗をとおして知らされました。また、かつては良いことはイエス様のせいにして、悪いことは自分のせいにしていましたが、今は良いことも悪いこともイエス様からとして受け取りたいと思っています。何が良いことか悪いことなのか私にはわかりませんから。

イエス様はすべてをご存知で、ありのままの私を受け入れてくださり、すべてを赦してくださっています。ですから私自身が頑張る必要はない、イエス様に正直にすべてを話して後はおまかせすればいい、と知ることができました。イエス様が私の中に住んでいてくださり、いつもともにいてくださること。また、みことば

を実行してくださるのは、私ではなくイエス様だということは本当に感謝です。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。（ヘブル　13・5）

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。（詩篇　138・8）

主人の両親は北海度の東部、北見に住んでいます。二〇〇三年くらいから兄弟姉妹が遠くから訪ねてくださり、北見でも不定期ですが集会が起こされています。二〇一一年五月、札幌喜びの集いで義父母の伊藤道人と智子は受洗の恵みに与かりました。ベックさんとのお交わりの後、「受洗したい」と義父が自分から義母に言ったというのです。ただ主の憐れみと恵みに心から感謝しました。

翌二〇一一年の秋、ご兄姉の助けをいただいて義父、義母、義弟の妻栄子姉妹、私の四人で御代田に行きました。義父は肺を患っていましたので前日まで出かけることをかなり迷っていたようでしたが、喜んで帰って来ました。

義父はその年の十二月に天に召されました。召される一週間前に、イエス様を信じている義妹真弥子姉妹が、義父のお見舞いに行った時のことです。以下は義父と真弥子姉妹の会話です。

「お父さんお祈りすればいいよ」

「何を祈ればいいんだ？」

「一生懸命やって来たけど何にもならなかった。後はイエス様よろしくお願いします。…こう祈ればいいよ」

本当に感謝です。きっと義父はイエス様に祈ったと思います。

義母は二〇〇四年ころからイエス様を信じるようになり、腰痛からくる足の痛みを通して主を体験しました。もっと早く信じていればよかったと喜んでいます。もう何も心配することがない。早く天国に行きたいと言っています。以前は義母も死に対する恐れがあったようですが、今は主に守られて平安そのものです。義父が召された後も義弟夫婦と一緒に北見にいて、兄弟姉妹が尋ねてくださることを楽しみにしています。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

すべては主がしてくださいました。今振り返ると恵みばかりです。いろんなことがありましたが、イエス様の許しなしには何も起きないことを知り、またいつも最善をなしてくださっています。先に召された家族とまた会えることも本当に楽しみです。理解できないこともありますが次のみことばに励まされ、感謝でいっぱいです。

わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。（ヨハネ　13・7）

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・11）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

伊藤さをり

一九五三年高知生まれ、清和女子中・高等学校、二松学舎大学卒

夫・隆道　長男・翔平　長女・早紀

イエス様からの一方的な恵みの歩み

伊藤　栄子



後列左が栄子さん、ご家族と

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。

（箴言　16・9）

1　聖書との出会い

私は、一九五四年五月十三日、山形県小国町で三姉妹の長女として生まれ育ちました。小国町には、聖書の教えを基本とした基督教独立学園高等学校があります。両親の勧めもあり、そこに進学しました。同級生たちは全国から来ていて、クリスチャンファミリーの子どもが半数でした。毎朝の礼拝で聖書のみことばが読まれ、一日がお祈りで始まりました。静かな優しさの中に包まれた日々でした。

三年間学びましたが、信仰の確信がないままに卒業しました。その後、看護学校を卒業し、看護師として働きましたが、イエス様からは遠く離れた生活でした。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。太陽と光、月と星が暗くなり、雨の後にまた雨雲がおおう前に。

（伝道者　12・1～2）

2　イエス様との再会

一九八二年十月、二十八歳で直隆と結婚、翌年娘の綾那が生まれ、幸せな生活を過ごしていました。子育ても順調でした。仕事が大好きな私は、夫や夫の家族の反対を無視して、子どもを連れて仕事に復帰しました。しかし二歳の子どもを連れて働くには夫の協力が必要でした。また長期の出張のときは山形の実家の母に預けて働きました。働くことに反対していた夫に対してうしろめたい気持ちを持ちながらも、生活も豊かだし幸せだと満足していました。

しかし、いつも自己中心の心でいましたので、計画どおりにことが運ばないと怒り、焦り、不安に支配されました。そんなとき、「神様は私の傍にいるのかなあ…」、「私には、イエス様を信じる資格があるのかな～?」という思いが生まれてきました。

高校の頃から私の知るクリスチャンはみな、聖書に詳しく、清く、毅然とし、やさしく、愛に満ち、祈る人のように見えました。私は、聖書は読んでいないし、清くない。イエス様の所に行きたいけれど、どうすればいいのと自問自答していた時期でした。

一九九一年、夫の転勤で札幌に引っ越しました。その年の九月、札幌に住む義姉の伊藤さをり姉に誘われ、家庭集会に集いました。ベツク兄の引用メッセージの中の聖書のみことばに心が動かされました。

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていな

ければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。（ヨハネ15・4～5）

「人間の罪を赦すためにイエス様が十字架に架かり死んでくださった。…十字架に我儘な私が架けてしまった。…そんな私でも赦してくださる？…そうなんだ…何もできなくても…自分がどんな者でもイエス様にとどまっていればよいのだ」とうれしくて、その晩涙が止まらなくなりました。

その時から、家庭集会、祈り会に集うたびにイエス様とともに歩む大切さを思い知らせていただきました。信仰の確信は曖昧でしたが、一九九二年の札幌キャンプで受洗しました。

主は、三年間の札幌生活で祈りの大切さを教えてくださいました。また、御霊としてイエス様が住んでくださっており、どんなときも進むべき道に導いてくださることを知らせていただきました。

その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。（ヨハネ　14・17）

あなたは全き平安のうちに守られます。（イザヤ　26・3）

3　イエス様の訓練

札幌転勤三年目の四十三歳のころ、体調を崩した夫から、北見の実家に帰りたいと相談されました。私は、夫もイエス様を知れば病気は治る、と思い込んでいました。「北見に戻りたい」と相談してくる夫に対して、「なにバカなこと言うのよ、自分たちの家がある東京に戻りたい。私の両親や妹や友人たちもいるし」と思っていました。しかし、聖書には夫に従いなさいとあります。集会の兄姉からも「夫の救い、両親の救い、北見でイエス様を伝えること…イエス様のご計画よ」と励まされ、一九九四年三月から、北見の主人の両親の家で同居となりました。次のみことばを握りしめて祈っていました。

では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。（エペソ　6・14～18）

わがままな私と、仕事をしてもうまくいかない夫との間には言い争いが絶えず、家庭にはいつも問題がありました。私は自分の力で何とかしなければと思い、義父は自分の力で息子を助けようとしていました。愚かな私は、「信仰さえなければ、東京に戻ることができたのに…」という思いもありました。祈っても、自分の思いを聞きとどけてほしい、というものが中心

でした。とうとう私は、これ以上ここで生活することは無理だと思うようになり、娘の大学入学に合わせて北見を去る決心をしました。

主よ。私の祈りを聞いてください。私の叫びが、あなたに届きますように。私が苦しんでいるときに、御顔を私に隠さないでください。私に耳を傾けてください。私が呼ぶときに、早く私に答えてください。

（詩篇　102・1～2）

もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。

もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。

（ローマ　8・10～11）

4　北見での集会

しかし主のみこころは違いました。二〇〇二年三月に札幌や旭川の兄弟が北見に来てくださり、その日から月に数回、多いときには毎週、集会のご兄姉が訪ねてくださることになりました。こうして自分の思いとは反対に、北見に残ることになりました。しかも、ご兄姉が何回か訪ねてくださる内に、「私にも、イエス様のお話を聞かせてください」との思いが義母に与えられ、我家での家庭集会が始まりました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ　29・11）

5　心配からの解放

家族（特に夫）の救いを求めながら、日々の生活に変化が無い状況の中で、目に見える結果を追い求め、不安、焦り、いらだちが心の中を支配していた、そんなとき、みことばが与えられました。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。（マタイ　6・31～34）

二〇〇五年九月、義母が御代田のキャンプに参加し、「自分の罪深さに涙が流れて止まらなかったよ」と打ち明けてくれました。イエス様は、主にある姉妹として義母との交わりを用意してくださいました。夫との関係においても、「夫が、第一に神の国とその義を求めるように」と祈れるようになり、心が軽くなりました。それまでは、何事につけても「私」、「私が‥」でした。しかし、イエス様の許しがなければなにごとも起こらないこと、またイエス様は、「すべてわたしがします」とおっしゃっていることを教えていただきました。

女は家庭を守るもの、主婦は静かに家で祈るもの、と思わないわけでもありませんが、私は仕事が大好きです。「イエス様仕事がしたいです」‥‥という祈り

と家族の了解のうちに、北見に来てからの二十年以上、大好きな仕事を続けさせていただいています。また、北見の家庭集会には兄弟方がみことばを携えて来てくださっています。義母の智子姉共々みことばに聞き入り、穏やかな笑顔の日をイエス様からいただいています。家庭集会でのご兄姉との交わり、義母との主にある交わり、大好きな仕事…主は祈りを聞いてくださっています。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。（ヨハネ　7・38）

6　義理の父、道人兄の昇天

義父は仕事人間で、毎朝七時から午後六時まで、木材工場に出勤するのが日課でした。家族がイエス様を信じることには反対しませんでしたが、義父自身は「僕には信仰は必要ない」が持論でした。信仰を持つことは、弱い者、病気の人、悩みのある人のすることで、どんなに苦しくても人は自分で頑張って努力で勝ち取るのでなければ人間はだめになる。それが口癖でした。

そんな義父でしたが、義母がイエス様を信じるようになり、大好きだった仕事も不況とともにうまくいかなくなり、そんなとき工場が漏電で火事となり、仕事を奪われました。義父はそのとき八十五歳でした。仕事がなくなった義父はどこにも行くところがないので、自然に家庭集会に参加するようになりました。家庭集会の日の朝には、庭や玄関を念入りに掃除してくれていました。集会での交わりでは、イエス様の話題には近づかず、メッセージのときは必ず心地よい睡魔に包まれている、そんな義父を集会のご兄姉がたが温かく見守ってくださいました。

二〇〇九年、義父は札幌キャンプに自らの意思で参加し、だれが勧めたわけでもないのに義母とともに受洗の恵みに与かりました。イエス様の恵みでした。

二〇一二年九月、義父は自分の意思で、訪ねて来てくださった兄弟に、「御代田喜びの集いに行きます」と約束しました。しかしその前日の夜まで、自分の体調もさることながら義母の体調を心配し、行くべきか、取りやめるべきか、と悶々としていました。しかし、義母の決意は固く、「お父さん、私は死んでも行くよ。お父さん、いやならやめなさい」と語っていました。当日の朝、義父はだれよりも早く身支度をして「直隆、早く空港まで送ってくれ」と言いました。

義父は、自分の気持ちとは関係なく御代田に来てしまったようなものでしたが、一番楽しそうにしていました。イエス様の話題に耳を傾け、穏やかな日をすごしました。その後は自宅でもイエス様の会話が多くなっていきました。

二〇一二年十一月、体調が悪いと言って、自分で車を運転して検査入院をしました。入院中に、キリスト集会の兄弟方のお見舞いをいただき、みことばと祈りに涙し、ますますイエス様を身近に感じたようでした。亡くなる当日も、みことばを読んでくれと言い、静かに目をつぶりかけたので、「明日、お兄さんが、お見舞いに来るからね」と声をかけると、「そうか、隆道がな～」と穏やか微笑み、眠りにつきました。

その晩静かに、天に召されました。

義父は、聖書を真剣に読むことや、言葉に出してイエス様を賛美することは、少なかったように思いますが、イエス様は義父の心の中の叫びを聞いてくださり、一方的な恵みで天の御国に招いてくださいました。義母も、義父が天国に行けたという確信をいただきました。

北見の地で主にある葬儀ができるのかと心配していましたが、イエス様の導きと恵みで、イエス様を証しする葬儀ができました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。（伝道者　3・1～2）

義母は、イエス様が傍にいてくださることを体験的に知って、「わたしには永遠の命の約束、死んでも生きるという約束があるからね」と穏やかな笑顔で日を過ごしています。

「救いの確信とは、『私のわがままは赦されている。私の国籍は天国です。私は義と認められ、主によって永久的に受け入れられている』と子どものように信ずることです。この確信の土台は、人間の内側にはありません。人間の理性でもないし、理解力でもないし、感情でもないし、気持ちでもない。イエス様の約束だからです」とのメッセージを思い出し、いつも傍にいてくださるイエス様の一方的な恵みに心から感謝しています。

伊藤栄子
一九五四年五月十三日、山形県西置賜郡小国町出身
基督教独立学園高等学校　浄風園高等看護学校卒
現在、北見市で小林病院看護師として勤務
夫・直隆　娘・綾那　義母・智子（八十七歳）

神の恵みによって、私は今の私になりました

柏谷　真美



左が真美さん、お母さまと

私は、一九七三年、是永正義・喜美枝の長女として神奈川県横須賀市で生まれました。幼稚園から高校までミッションスクールに通い、聖書の知識は学びましたが、イエス様は、遠い昔にいらした方で、私とは関係のない方だと思っていました。天地万物を創造された神様はいらっしゃると思っていましたが、すごく遠い存在で厳しい方であると感じていました。日々の生活の中で神様に祈ることもありましたが、私の祈りが聞かれているのか、わかりませんでした。努力して善人にならなければいけないと思っていました。

高校一年生の時に将来について悩みました。何のために生まれてきたのか、何のために生きていくのかわかりませんでした。イエス様を知らなかった私は、悩みすぎて全身湿疹だらけになりました。集会に集うようになっていた母と、初めてイエス様に祈りました。示されたみことばは、第1コリントの10章13節でした。イエス様が必ず最善の道へと導いてくださるということ

がわかり、湿疹は徐々によくなっていきました。

あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

大学二年生（十九歳）の時、母方の祖母の葬儀で、初めてベック兄とお会いしました。ベック兄は、ある敬虔なキリスト教信者の方の話をなさいました。その方は長年教会に通い、善行をたくさん積んでいましたが、天国へは行かれないと思っていたそうです。私も同じように考えていました。罪を犯したことのない完璧な善人でなければ天国へは行かれないと思っていたからです。

ベック兄は「本当はとても簡単なことです。今までに犯してきた罪を『ごめんなさい』と、素直に頭を下げて、幼子のようにイエス様を受け入れるだけで、すべての罪は赦されて天国へ行くことができるのです」とおっしゃいました。

まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。（マタイ　18・3）

そのメッセージを聞いた瞬間、暗かった葬祭場に光が差し込んだように感じ、ベック兄の後ろに光が見えました。その光はイエス様でした。イエス様が今も生きておられると感じました。「目からうろこが落ちる」という聖書のみことばのように、私の目は開かれ、涙があふれて止まりませんでした。私の中にあった様々な汚い感情が涙で清められていくようで、体験したことのない喜びを感じました。

主が生きておられ働いてくださっていること、私は主によって造られ生かされていることが確信に変わりました。私は主に愛されていて、世界中の造られたものすべてを主は愛してくださっていると実感しました。主が造られたものは何て美しいんだろうと、目に入るすべてのものが美しく輝いているように見えました。みことばや賛美が、心にしみわたっていきました。それと同時に、死ぬことが怖くなくなりました。イエス様のおられる天国へ行けるのは、これ以上ない喜びであると感じました。

イエス様と出会い救われて、それだけで満足していました。自分のことしか考えていませんでした。私がイエス様を信じていて、私とイエス様の関係があればいいと勝手に思い込んでいました。イエス様は、苦しみから救い出してくださる方であるとしか考えていませんでした。苦しい時、困った時しか祈らず、何も問題のない時は聖書も読みませんでした。「みこころのままになりますように」と祈りながらも、心の中には自分の望むように歩ませて欲しいという思いがありました。自分の思いの方が、イエス様のみこころよりもずっと強く存在していました。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1～2）

苦しい時だけ祈り、苦しみが去るとイエス様から離れてしまう不信仰な者でした。イエス様から離れること、自分を第一とすることが大きな罪であることを知りませんでした。いつでも自分が一番大切で、自分が幸せになりたいという思いでいっぱいでした。幼い頃から、家族や友人と一緒にいても、ずっと孤独や空しさを感じていました。私の本当の苦しみ、悲しみ、孤独をわかってくれる人は誰もいないと思っていました。どうに

かして孤独や空しさを埋めたいと思いましたが、埋めることはできませんでした。

二〇一三年九月に、私に試練が与えられました。その瞬間、私は立っていることもできないぐらい打ちのめされました。真っ暗な闇の中に突き落とされたように感じました。なぜイエス様は、こんな試練をお与えになるのだろう。耐えられない試練はお与えにならないはずなのに。脱出の道も用意されているはずなのに、その道が見つからない。苦しい、辛い、助けて、と叫ぶような気持ちで祈り続けました。この辛いどん底から抜け出したいという気持ちでいっぱいでした。苦しくて苦しくて押しつぶされそうでした。なぜですか?どうしてですか?早く早く助けてください、という祈りをくり返していました。祈って心が落ち着いても、またすぐに不安な気持ちに引き戻されたりしました。

二日後、突然、イエス様に救われた日のことを思い出し、あの時の喜びがよみがえってきました。救われた日の喜びや恵みのことを、ずっと忘れていました。思い出した後、窓の外を見て、青い空、白い雲、緑の木々を美しいと思いました。あの時と同じように世界は美しく、あの時と同じようにイエス様は私を愛してくださっていると感じました。

あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。（黙示録　2・4～5）

あなたは私を多くの苦しみと悩みとに、会わせなさいましたが、私を再び生き返らせ、地の深みから、再び私を引き上げてくださいます。（詩篇　71・20）

さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、また、包んでくださるからだ。主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。私たちは、知ろう。主を知ることを切に追い求めよう。主は暁の光のように、確かに現われ、大雨のように、私たちのところに来、後の雨のように、地を潤される。（ホセア　6・1～3）

私の力ではどうすることもできない試練で、自分がいかに無力であるのかを知りました。イエス様が最善の道を用意してくださっているから、すべてを委ねれば何も心配することはないと思えました。恐れることは何もないということがわかり、心の中に平安がおとずれました。初めてすべてを明け渡すことができました。

私がずっと自分を大切にしてイエス様から離れていた間も、イエス様はすぐそばにいてくださり私を愛し続けていてくださいました。苦しい時にしか呼び求めなかった私を見捨てずにいてくださいました。数えきれないほどの恵みをいただいていたことにも気がついていませんでした。日々感謝して祈りたい、自分のためではなくイエス様のために生きたいと思うようになりました。イエス様のことをもっと知りたいと思い、聖書を読み始めました。聖書はイエス様そのものであり、私に語りかけてくださっているように感じました。一つひとつのみことばが、頭で理解したり解釈したりするのではなく、心にしみわたっていきました。聖書に書かれているすべてが真実であると信じられるようになりました。

永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。おとめイスラエルよ。わたしは再びあなたを建て直し、あなたは建て直される。（エレミヤ　31・3～4）

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻さ

れました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。（イザヤ　38・17）

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。（ヘブル　13・5）

聖書を読み進めていくうちに、みことばの光に照らされて、私がいかに罪にまみれ、傲慢でわがままで欲張りであったかがわかりました。私の中には、よいところは一つもありませんでした。自分で生きているのではなく、生かされているのだとわかっていたのに、自分で生きているような気になっていました。私の力で手に入れたものは何一つないのに、不満ばかりつぶやいていました。

いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。（1コリント　4・7）

ああ、あなたがたは、物をさかさに考えている。陶器師を粘土と同じにみなしてよかろうか。造られた者が、それを造った者に、「彼は私を造らなかった。」と言い、陶器が陶器師に、「彼はわからずやだ。」と言えようか。（イザヤ　29・16）

十九歳の時は、真の悔い改めをしていなかったと思います。イエス様が十字架にかかってくださったのは私の罪のためでした。私の身代わりになってくださるほど、私を愛してくださっていることを知りました。これほど愛してくださる方は、イエス様しかいらっしゃらないことがわかりました。感謝してもしきれません。

私が犯し続けてきたそむきの罪のために、何の罪もないイエス様は十字架にかかってくださり、三日後に復活してくださいました。今までの自分がイエス様とともに十字架にかかり、イエス様のために生きるように新しく生まれ変わらせていただきました。

彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。（イザヤ　53・5～6）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ　2・20）

今回、試練を与えていただいたことが感謝にかわりました。これまでは、試練は私を愛してくださっているからだということはわかっていても、恵みであるとは思えませんでした。でも今は、試練は恵みであり愛であることがわかります。私を砕くために必要な試練でした。粉々に砕いていただかなければ、すべてを明け渡すことはできませんでした。自分の無力さを知らなければ、お委ねすることはできませんでした。私を子として扱ってくださり、訓練してくださるために与えられた恵みでした。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（ヘブル　12・5～7、11）

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。（1ペテロ　4・12～13）

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇　119・71）

徹底的に砕いていただいて、私は空の器のようです。その器にイエス様がたくさんの愛と恵みを満たしてくださいます。今まで味わったことのない平安と幸せで心が満たされ、孤独や空しさから解放されました。もっとイエス様のことを知りたい、兄弟姉妹とイエス様の話がしたいという思いになり、集会へ行きたいと思いました。

九月二十九日、父と吉祥寺の日曜礼拝に集いました。新会堂の中に入った途端、涙が出そうになりました。二十年以上さまよって、やっと我が家にたどり着いた放蕩息子の気持ちになりました。イエス様を離れ、自分の欲望のままに生きてきた私を、イエス様はたくさんの愛で迎え入れてくださいました。百匹のうちの迷い出た一匹の羊のような私を、イエス様は連れ戻してくださいました。今まで好き勝手に生きてきてごめんなさい、連れ戻してくださってありがとうございますとイエス様に祈りました。感謝の気持ちでいっぱいでした。

今は、夫、娘、親戚、友人の救いを祈っています。私がた。最初の賛美から最後の賛美まで涙が止まりませんでした。

あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。（申命記　8・2）

あなたの神、主は、この四十年の間あなたとともにおられ、あなたは、何一つ欠けたものはなかった。（申命記　2・7）

あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。（1ペテロ　2・25）

立ち返らせていただいたのも、主からの一方的なあわれみであり、私がイエス様としっかりと結びつくため、家族の救いのためであると思います。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。（詩篇　138・8）

イエス様は、私の家族の救いを約束してくださいました。必ず成し遂げてくださる方なので、その日が来るのを楽しみに、祈りながら待ち続けたいと思っています。

柏谷真美（かしわや　まみ）
湘南白百合学園小・中・高　卒業
早稲田大学第一文学部　卒業

御手のわざは確かです

名須川　知子



中央が知子さん、みなさんと

私は昔の日々を思い出し、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたの御手のわざを静かに考えています。（詩篇　143・5）

私は、一九五五年四月、無教会キリスト者だった父の淳（あつし）兄、母の一子（かずこ）姉の長女として東京で生まれました。二歳下の弟の滋、八歳下の妹の典子の五人家族で育ちました。

私の生まれた当時、母の体調が思わしくなく、母体の命か赤ちゃんの命か、と二者択一を迫られるような状態だったそうです。病院の医師の中でただ一人クリスチャンであった方が「二人の命を救う」と言ってくださった、と聞いています。詳細はわかりませんが、主に祈ってくださったのだと思います。母の命も私の命も無事でした。

一～二歳の時、活発だった私は、母の化粧台の化粧水を舐めて顔が真っ青になり、目が寄ってしまって、救急病院に運ばれたそうです。胃の洗浄を受けたのですが、もし化粧水のなかに危険な化合物が入っていたら、洗浄しても助からなかったそうです。

また、最近になって腸の検査を受けて、生まれつき腸がまわっているような形で収まっている、トルネードという症状であることがわかりました。「これは、体内で癒着しやすいのですが、これまでになにかありませんでしたか」と聞かれました。しかし、五十八年間は何も異常がなかったので、医者からは「タッチセーフですね」と言われました。

このように思い返せば、本当に主の見守りと支えを感じずにいられません。

小中学校時代は、公務員だった父の仕事のため、小学校三校、中学校三校を転校しました。船橋の自宅の近所の、中学二年の時に出会った友人が大学時代に受洗し、その後ずっと祈ってくださっていたことを後で知ることになります。

さて、私が主イエス様を自分の救い主として受け入れたのは、社会人になった三十三歳の時です。当時留学していたハワイで『光よあれ』を読んだ時です。クリスマスに日系教会であるマキキ教会に行き、そこで長澤姉妹のお母様の唐澤姉妹のお証しを聞きました。それまで私は、聖書のことやイエス様の話は聞いておりましたが、日々の生活は順風満帆で、努力すれば成し遂げることができるという信念をもち、勉強にいそしみ、寝ないで学ぶという生き方をしていました。学生時代、仲間とも距離をおいてその姿を維持し続け、希望の研究職につきました。

その後、大学からドイツ、ハワイに十ヶ月派遣され、思うがまま、好きな学びをしていました。今でも覚えておりますが、出発前に荷物の中に聖書が入っていたのをわざわざ実家に置いていったほどです。今思うと、本当に「自我」の塊であり、かなりのエネルギーをもって生きていたと思います。その生来の性質は変わりま

せんが…。

それまで、研究にかかわることは持ち前のガッツでなんとか乗り切っていましたが、うまくいかないのは人間関係でした。二十四歳で高校時代の同級生と結婚したものの、就職のために私の方から単身赴任を言い出したうえに、二年も経たずに離婚しました。その後、別の人と結婚するつもりでしたが、それもうまくいきませんでした。そのような時、前述した留学先でイエス様に出会ったのです。

ハワイはとてもすてきな常夏の場所です。しかし、その中にあってもなにか空しくて、幸せ感を感じることはできませんでした。まだイエス様を知らなかった私は、なぜこんな思いになるのか、本当に不思議でした。目の前のことはすべてこれ以上ないというほど満たされているはずなのに、空しさが心を占めているのです。聖書の伝道者の言葉を思い出します。

空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。

（伝道者　1・2〜3）

今思うと、この環境と思いは主のお取り計らいであったことがわかります。この時だからこそ、『光よあれ』に載っていた証しが胸に染み込んできました。そこには、「これが幸せだ」と思い、そこに向かって努力していたにもかかわらず、予期せぬ事態によって頼りにしていたものがすべて崩れ去る、というような事例が述べられていました。

もし私がこの立場に立ったなら、のた打ち回るだろうと思わされるようなことばかりでした。本当の幸せを私もつかみたいと思うようになりました。本を読み終えたとき、涙が出ました。そして、心からイエス様に「これまで、イエス様の名前を聞いていましたが、無視してごめんなさい。そして、私もこのような平安がほしいです」と祈りました。

不思議なことに、それまでの空しさがなくなり、心の中に温かいものがあふれ出てくるような気がしました。そして、「人生を過ごすなら、空しさよりも心の平安をもって日々過ごすほうが絶対いいにきまっている」と思いました。

このころの信仰は、まだまだ自分中心でしたが、とてもうれしく思ったのは事実です。でも、まだ、自分自身の罪には気づいていませんでした。

三月末のイースターの日にハワイの海で受洗したあと、数日後に帰国しました。四月一日から大学での仕事が再開します。同じ景色を見てもまったく違う環境に思えて、うれしいスタートを切ったのが平成元年でした。その後、神戸集会に導かれ、無教会に集っていた両親も沖縄キャンプで受洗する恵みに与かりました。

イエス様は、生活の中での信仰を、実感をもって少しずつ教えてくださいました。聖書を読んでいて、自分の生活やものの考え方には何かみこころとは違うものがある、と思えてきました。たとえば、日曜日は礼拝にと思っていても、原稿の締め切りがあるとそちらを優先したり、仕事中心の生活のために疲れ切って礼拝に出る、ということがよくありました。しかし、どうも違う、という思いが湧き上がってきました。また、再婚も祈ってはいましたが、それも主は喜ばれないようだ、ということにも気づきました。しかし、人の思いは複雑です。さまざまな思いが渦巻き、自分でもよくわからなくなってしまうのです。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。

（ローマ　7・15）

そこで、多くのキャンプに行って祈り、メッセージを聞き、兄弟姉妹とお交わりをもちました。主はそこで具体的に答えをくださいました。

再婚のことをベック兄に「主は喜ばれないようです」と申しましたら、「そのとおりだよ。知子」とやさしく語ってくださいました。また、仕事においても、昇格に関して悶々としていた時期がありましたが、「主よ、必要なことを成してください」と祈ることにより、この世の地位は問題ではない、と思うようになりました。

難題だった博士号の取得も、本来であれば必死になって論文を書こうとしていたと思いますが、主に祈ることからスタートしました。それこそパソコンの前で祈ってから始めました。

その頃の日記には、主を賛美すること、必要であれば主が論文を作成させてくださる、ということばかりが記されています。その結果、探していた資料も奇跡的に見つかり、その資料のおかげで博士論文を完成することができました。従って、博士号は主のものです、私のタイトルではありません、としか言えません。

しかし、主を見上げていなければ、すぐに自分の古い性質が顔を出してしまうことも毎日のように思わされています。この世での名誉や栄誉を自分のものにしようとする力が働くのです。

私は、このように不完全なものですが、主は多くの御働きをしてくださいます。まず、御代田に別荘を与えてくださいました。関西の姉妹たちと車で御代田キャンプに行くと、到着が夜中になって困っておりました。そこで、普通に考えれば無謀だと思われる祈りですが、「別荘を与えてください」と姉妹たちと祈り始めました。主はすぐに祈りに応えてくださいました。別荘を建てる、という兄弟姉妹たちの計画に加えていただけることになったのです。

しかし、その直後に別荘の近くで車の物損事故をおこしてしまいました。その時、別荘を与えられて有

頂天になっており、「私の」別荘と思っていることに気づきました。「そうです。これも主のものなのです。たまたま管理人として与えられたものです」と改めて知らせられました。

また主は、さらにその後マンションを与えてくださいました。新神戸から地下鉄で三十分、徒歩五分というアクセスのよいところで、現在、家庭集会と火曜の学び、祈り会に用いてくださっています。

しかし、このときは退職金を前借りしての購入だったものですから、月々の返済を考えると、「どうしたものか」と思う気持ちもありました。その時、聖書の中の金持ちの青年の箇所が思い浮かびました。それとともに、なぜ私は自分でいろいろ思い煩っているのだろう、「これまでも主はずっと最善に導いてくださったではないか。これからも主は成してくださる」という確信が与えられました。後日談ですが、その後大学で管理職手当をいただく立場になりました。主は、今は月々の返済をちょうど満たしてくださるようになったのです。

しかし、もっと大きな恵みがありました。このマンションで家庭集会をするようになってから、大学院の教え子たちが多く集ってくれるようになったことです。そして、主のみことばを聞き、自らイエス様を受け入れるようになった方もいます。また、近隣の新しい魂も導いてくださっています。

このマンションでの家庭集会も西神集会の祈りで導かれたものです。西神集会には以前は家庭集会がありましたが、さまざまな経緯でしばらく行われてきませんでした。そこで、家庭集会を、と共に祈らせていただきました。私自身は、両親の高齢化もあって、神戸市内の便利なところにマンションがほしい、という思いを持っていましたが、家庭集会に用いられることは思いもよらないことでした。

しかし、主の思いははるかに高いものでした。主は、

必要をすべて満たしてくださっています。現在、家庭集会は、兄弟によるコーディネート、姉妹たちによる準備と手料理というように、集会の兄弟姉妹をとおして、イエス様のご栄光があらわされていることが本当に喜びです。

イエス様は日々の訓練とともに、それを上回る恵みを常に与えてくださっています。私自身のもっている自我と欲望の塊りから生まれるさまざまな具体的な罪、それは日々の言動にあらわれるのですが、それをも十字架にかけて赦してくださっている、ということはなんという素晴らしいことでしょうか。

そして、二年前、もともともっている両股関節の変形性のための股関節置換手術をしました。手術前は不安もありましたが、今は痛みもとれて、以前よりも軽快に歩くことができるようになりました。これも主が必要に応じてくださった恵みだと思っています。

主にあって出会う多くの方々へ、数えきれない恵み、心の平安、罪の赦しが与えられている喜びの体験を是非とも、それも言葉でだけではなく、私自身が主の媒体としてお伝えできればと思っています。また、それも主が成し遂げてくださいますので、感謝です。

心から主の御名を賛美します。

私の神、王よ。私はあなたをあがめます。あなたの御名を世々限りなく、ほめたたえます。日ごとにあなたをほめたたえ、あなたの御名を世々限りなく賛美します。主は大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません。

（詩篇　145・1〜3）

名須川知子
名古屋市立広路小学校入学後、
三重県尾鷲小学校を経て
千葉市稲毛第二小学校卒業。

千葉市立稲毛中、船橋市立習志野台中を経て
芦屋市立山手中学校卒業。
一九七四年　兵庫県立芦屋高校卒
一九七八年　お茶の水女子大学卒業、一九八〇年同大学院修了
一九八一年　兵庫教育大学助手から講師、助教授を経て、二〇〇四年から同大学教授

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

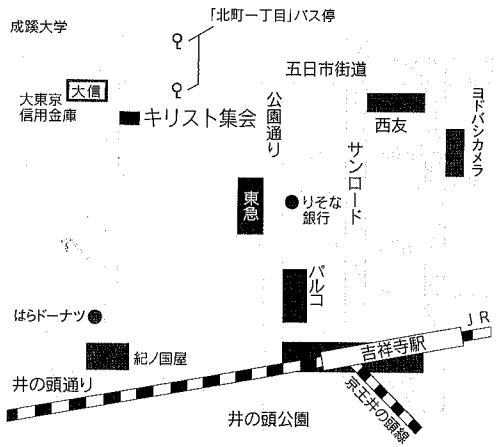
よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

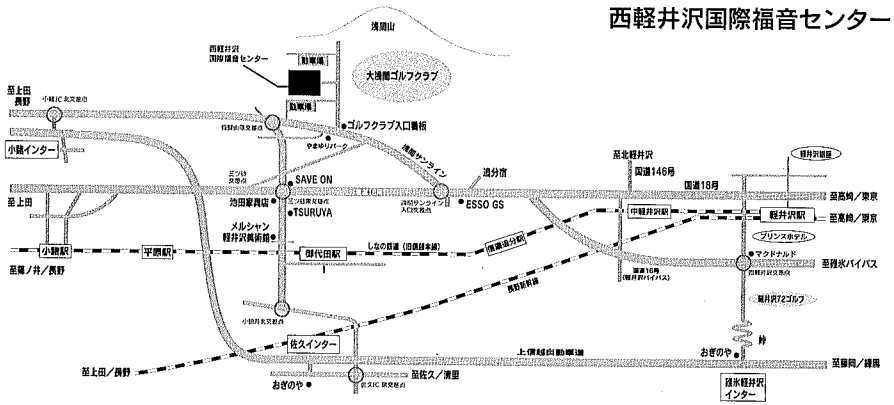
吉祥寺キリスト集会
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



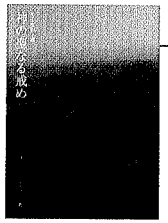
西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15 〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33 〒389−0201

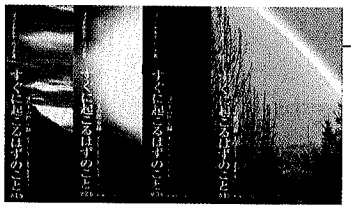
■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと－ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ　－私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を100円で配付しています。
お気軽にお申し込みください。

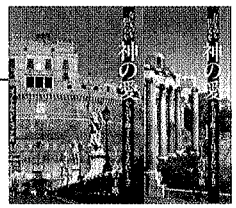


実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

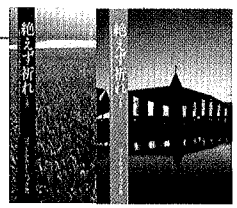
「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物